

大学に在籍する聴覚障害学生への 海外留学支援

平成 28 年度

筑波技術大学大学院技術科学研究科

情報アクセシビリティ専攻

松 原 夢 伽

目次

第1部 序論.....	1
第1章 問題の所在.....	2
第1節 日本国内のグローバル化への変遷.....	4
第2節 日本人の海外留学の現状.....	7
第3節 海外留学の効果と問題点.....	12
第4節 日本人の海外留学を促進するための課題.....	14
第2章 聴覚障害学生の海外留学.....	16
第1節 聴覚障害学生の海外留学の現状.....	16
第2部 本論.....	18
第3章 本研究の目的・構成.....	19
第1節 本研究の目的と構成.....	19
第2節 研究方法.....	20
第4章 聴覚障害者・学生への海外留学支援に関する調査.....	21
第1節 大学に在籍する聴覚障害学生への質問紙調査.....	21
第2節 海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査.....	50
第5章 総合的考察.....	81
第1節 大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学に対する意識.....	81
第2節 聴覚障害学生への海外留学支援構築についての提案.....	85
第3部 結論.....	89

第6章 総括と結論.....	90
第1節 総括と結論.....	90
第2節 今後の課題.....	93
引用・参考文献.....	94
インターネットによる引用・参考文献.....	96
付録.....	98
謝辞.....	103

筑波技術大学

修士（情報保障学）学位論文

第 1 部 序論

第1章 問題の所在

近年、日本ではグローバル化という言葉を各分野で耳にするようになり、教育面においては教育機関による外国語教育、国際交流等といった諸外国との関係の構築が盛んに行われるようになった。

文部科学省（2011）は、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間へと育てることが求められている」と述べている。

高等教育機関の中でも特に大学では、積極的に海外留学を推進し、大学生のグローバル人材の育成に力を注いでいる。また、ここ数年、海外留学をする日本人大学生数も増加傾向にある。

しかしながら、海外留学をするにあたり、大学生は在学する大学の交換留学制度を利用する他、私費留学によって海外留学をする傾向も見られている。その場合、大学を休学する、単位が互換されない、4年間で卒業できない、経済的理由によって海外留学を断念する等、課題も見られている。これらは大学に在籍する健聴学生（以下、健聴大学生）についての研究（河合（2009）,池田（2011）,杉野ら（2014））から見られるものであるが、聴覚に障害のある大学生（以下、聴覚障害学生）の海外留学とその支援に関する先行研究は見られず、聴覚障害学生の海外留学について探求されていないことが現状である。今日までに海外留学を経験した聴覚障害者はいるが支援体制に関する先行研究が見受けられないことから、国内における組織としての聴覚障害学生の海外留学支援は僅少であることが考えられる。

そこで、本研究では、まず健聴大学生を対象にした先行研究から日本人の海外留学における現状を把握し、問題となっていることを調べる。そして、それらの諸問題が聴覚障害学生にも同様に見られるのか、また、聴覚障害学生が海外留学に対してどのような意識を持っているのか、留学意志はあるのか、さらに聴覚障害を有するが故の特有の問題があるのかについて質問紙調査を行う。さらに、海外留学経験を有する聴覚障害者から留学時にどのような経験をし、何を学んだのか、困難に感じた場面はどのような時だったのか等に

ついて面接調査を行う。これらの調査より、大学に在籍する聴覚障害学生への海外留学支援について、どのような体制を構築するかを検討し、大学等の高等教育機関における障害学生支援担当職員に提案することを目的とする。

第1節 日本国内のグローバル化への変遷

日本のグローバル化(*1)が目立つようになったのは1990年代からである。その中で、国際社会に通用する人材育成のグローバル化と英語の社内公用語化といったような日本の企業内にあるグローバル化の2つの意図が今日の日本に存在している。

企業（経済）面から見ると、経済産業省のグローバル人材育成委員会報告書（2010）では、グローバル化が進展している世界の中で多様な人々と共に仕事をし、活躍できる人材を「グローバル人材」と呼称している。また、グローバル人材に共通して求められる能力として、①「社会人基礎力」、②「外国語でのコミュニケーション能力」、③「異文化理解・活用力」を挙げている。これに加えて、基礎学力や専門知識、基本的な生活習慣等もグローバル人材としての活動を支える基盤となると提言している。

一方、生活面から見ると、法務省（2016）は、平成27年末の在留外国人数が223万2,189人で前年末に比べ11万358人（5.2%）増加していると発表した。総務省統計局（2016）による調査より、日本の総人口数は1億2,696万人であり、その内、約1.8%を在留外国人が占めていることが分かる。さらに、その内の70万500人が永住者である。

この統計から見ても分かるように、現代の日本は国内での多文化共生が求められる時代へと移り変わり、「異文化や外国・外国人を理解し、コミュニケーション能力を備えたグローバル人材が必要とされている（池田（2011）」と日本社会全体が抱える課題の一つとして挙げている。

上記の課題を達成させる手段の一つとして、筆者が考えたのは、グローバル人材を最も育成しやすい環境といえる高等教育機関（大学、大学院、短大など）である。しかしながら、経済産業省のグローバル人材育成委員会報告書（2010）内の『「グローバル人材」の育成に効率的と考えられる大学での教育プログラム』では、大学という教育機関でグローバル人材の育成をするか否かは各大学の判断によって異なると断言している。

以上より、国の事業で必要と提言されているにも関わらず、それを求める範囲に曖昧さが見えるが、大学での教育プログラムによるグローバル人材の育成の効果をまとめると次のようになる。

グローバル人材に必要なこととして、(1) 外国語教育プログラム、(2) 文化的・歴史的な背景に由来する「異文化の差」が存在することを知っていることである。この2点に効果的な手段として、海外留学が挙げられている。経済産業省のグローバル人材育成委員会報告書(2010)には、「海外留学等については、(中略)いずれの形態であっても、「異文化の差」を体感し、多様な人材の中で「異文化理解・活用力」や外国語でのコミュニケーション能力を高められるものであり、「グローバル人材」の育成に有効であると考えられる」と述べられている。

また、黒田(2015)は、「高等教育の国際化には様々な形態が存在し(中略)、世界貿易機関(WTO)は、サービス貿易の自由化交渉の対象として、教育をとりあげ、サービス貿易の4つのモードに当てはめて分類している」と述べている。その中でも、国境を超える取引にあたる国際的な遠隔教育の提供(インターネットなどの活用による高等教育の国際的活動の形態)や海外における消費にあたる最も伝統的と言われる高等教育の国際的形態の海外留学が挙げられている。さらに、「高等教育のグローバル化は社会経済のグローバル化に対応するだけのものではなく、平和の達成や地球規模課題の解決に対する高等教育の新しい国際的役割を大学自身で発見、自覚し、グローバルな教育研究のあり方を積極的に作り上げていくこと」を課題として挙げている。

一方、文部科学省(2014)は、英語以外の言語はコミュニケーション手段上必要ではあるが、グローバル社会化においては、国際共通言語である英語の教育改革を重視している。その英語教育改革として、グローバル化はこれまでのような一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、グローバル人材の育成において、その能力の向上を課題としている。これらを踏まえた上で、子どもたちの将来の職業的・社会的な環境を考慮した上で課題を次のように挙げている。

日本人としてのアイデンティティや日本文化に対する深い理解を前提とした、

- ・豊かな語学力、コミュニケーション能力
- ・主体性・積極性
- ・異文化精神等を身につけて様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成
- ・国際共通語である英語の向上

また、文部科学省（2009）は、海外留学生の日本での就職を考慮する背景に、「日本と母国の架け橋となることを望んでいる」と述べている。しかし、就職外での課題としては、「企業だけでなく、高等教育機関や研究機関でも、その環境を国際化(*2)するとともに、日本人教員や研究者と切磋琢磨して一層国際競争力を向上させることが求められている」と提言している。

さらに、上記以外でグローバル化が急速する日本社会の中での高等教育機関の変化として挙げられることは、語学科目の履修必須化、海外研修・留学の啓発、TOEIC・TOEFLなどの受験推奨及び単位互換化、スピーキング・リスニングクラスの設置であると筆者は考える。

本節より、日本国内においてグローバル化が高等教育内においても重要視されることが把握できた。また、日本人のグローバル人材育成のために海外留学が効果的であるということが文部科学省（2009）らの先行研究から把握できたことから、海外留学と日本国内のグローバル化は結びつくものであることがいえる。しかしながら、これらの先行研究は、聴覚障害者が含まれているか否かも判断しがたい。しかし、本研究を行うあたり、筆者は大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学が日本のグローバル化に結びつくと考えている。

次節からは、日本人の海外留学の現状について述べていく。

(*1) グローバル化の定義を「いかに国家の枠組みと国家間の壁を取り払い、資金、人、技術などの資源が自由に移動できる制度を形成するかの問題」（宮脇, 2001）とし、国際化とは異なるものとする。

(*2) 国際化：文部科学省(2009)は、国際化と提示しているが、意味はグローバル化を指していると文面から読み取れたため、そのまま表記した。

第2節 日本人の海外留学の現状

文部科学省が2000年に掲げた、2020年を目途に留学生の受け入れを30万人にする「留学生30万人計画」も残すところ4年となった。この計画は、日本の大学等に留学する外国人留学生を主対象としているが、「(前略)海外から優秀な人材を受けのばかりでなく、大学等間交流の活性化や世界で活躍できる優秀な日本人の育成の観点から相互交流も重視すべきであり、日本人の海外留学の促進も重要である(文部科学省(2009))」と、日本人の海外留学も課題として提示している。

法務省(2016)の調査(*1)より、在留有資格を持つ外国人留学生数(*2)は24万6,679人に対して、独立行政法人日本学生支援機構(2016)の調査(*3)による日本人留学生数は、8万1,219人である。この数値を見て分かるように、約3倍の差を生み出している状況からして、求められているグローバル人材の育成の結果が結びつくまで長期戦になることが予測できる。実際に海外留学をする日本人学生数の状況を見ると、長期の留学においては北アメリカ大陸、次にヨーロッパ大陸に極めて多く見られる。この2つの大陸への留学が半数以上を占めていることから、グローバル化に関わる技術等の多様な専門性の支援が活発に行われていることが窺える。短期間になると、アジア大陸やオセアニア大陸への留学数も多いが、これは日本の大学内の語学研修プログラム等が関与していると筆者は考える。

さらに、文部科学省(2016)より、大学等が把握している日本人学生の海外留学状況については、短期の留学を中心に留学生数が増加し、近年は学位取得等を目的としない短期留学が先進国等において増加傾向にあり、日本人の海外留学についても同様の傾向が見られている。

このことから、日本人海外留学生が増加傾向にあるにも関わらず、短期留学が増加している背景に留学費用、大学の在学費用の支払い、就職活動などが問題として存在していることが考えられる。

今後の海外留学の主な課題としては、「①経済的な面に関して奨学金の支給による支援、②システム上の面に関して海外大学と協定を締結し、単位認定や互換、成績評価等において国際的な基準を導入する等、国際的な質保証の取組を早急に進める、③政府として、海外に留学している日本人の採用意欲のある企業をサポートするなど、学生が留学し

て一生懸命勉強すれば、就職する機会も広がっていくという環境を整備すること（経済産業省（2010））」が挙げられる。

高等教育に重視される海外留学の課題がある一方、高等教育機関が海外留学支援を行うことへの効果点については明記されていない。しかし、これは文部科学省や経済産業省が掲げた目標のグローバル人材育成が高等教育機関に求められている教育意義の一つとして考えられると筆者は推察する。また、学生のグローバル人材育成をすることにより、学生の就職先の選択領域は拡大し、国の狙いでもある国際競争に可能な能力を持ち、日本の経済力、国政力等に結び付けられると考えられる。

次に海外留学未経験者の実態についても把握しておく。

河合（2009）の調査によると、学生は以下のことについて不満を抱いている。

- (1) 文系学生・理系学生と比べて理系学生は学部留学志向が低いこと
- (2) その背景に、明確な動機の不在とカリキュラム、単位互換などの制度上の制約にあること
- (3) 文系・理系の学生にとっての共通した問題とは、語学力への不安が留学を阻害していること
- (4) 留学に対する情報提供が周知されていないこと

以下に、筆者の所見をまとめる。

(1) 文系には、英文科等のある文学部に在籍する日本人学生や海外留学生の存在が海外留学への意識を高め、留学志向に影響を与えていると想像する。一方、理系は実験、研究、医学等、大学在籍時（入学時含む）から英語を必要とした生活圏にいるため海外留学の必要がないことが考えられる。

(2) 理系は、文系と比較すると大学で修学する学問の内容が将来の就職に直結する可能性が高いことが考えられる（例：医師、技術者等）。このことから、理系学生は文系学生よりも入学時から卒業後までの人生設計が計画済みの状態で入学していると考えられる。

(3) 各大学に英語科目のカリキュラムが存在しているとはいえ、学生からすると卒業単位取得が目的など、実用的な語学使用として生活の中で浸透する程、一般大学での使用頻度は低いと考える。

(4) 学内周知の方法に問題があると考ええる。現在、大学内での広報手段は、ポスター掲示、学内メール、ホームページ、講義内資料配付や告知が主流である。どれも効率的な手段ではあるものの個々を対象にした周知方法ではないため、海外留学に興味のある学生のみを獲得していると考えられる。

以上のことから、日本人の海外留学生数が増加していることが明らかにはなっているが、留学形態、高等教育機関からの支援体制など詳細を追及していくと、様々な問題、課題も見られている。今日までの先行研究、文部科学省や独立行政法人日本学生支援機構の調査内容等で海外留学促進への変動はあるが、海外留学の効果と問題点を次節より改めて考察していく。

(*1) : 平成 28 年 3 月 11 日に公表された「平成 27 年末現在における在留外国人数について（確定値）」のデータ数値である。

(*2) : 在留資格の対象は、(1) 大学、大学院、短大、専修学校の専門課程、準備教育機関、高等専門学校、(2) 高等学校、専修学校の高等課程又は一般課程、各種学校、設備及び編制に関してこれらに準ずる教育機関である。

(*3) : 平成 28 年 3 月に公表された「平成 26 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」及び「平成 26 年度協定等に基づかない日本人学生留学状況（在籍大学等把握分）」のデータ数値である。

表1 海外留学をする日本人留学生数

期間	1か月未満	1か月以上	3か月以上	6か月以上	1年以上	不明	計
地域名	(人)	3か月未満 (人)	6か月未満 (人)	1年未満 (人)	(人)	(人)	(人)
アジア	18,931	1,289	1,873	2,374	357	83	24,907
中東	212	19	20	69	10	0	330
アフリカ	171	58	32	52	3	0	316
大洋州	5,333	2,289	657	1,125	110	42	9,556
北米	13,031	2,588	4,309	5,502	591	123	26,144
中南米	210	50	59	220	22	5	566
欧州	10,951	2,125	1,498	3,692	534	52	18,852
その他	14	0	222	164	23	125	548
計	48,853	8,418	8,670	13,198	1,650	430	81,219

出典：独立行政法人日本学生支援機構「平成26年度協定等に基づく日本人学生留学状況及び協定等に基づかない日本人学生留学状況（在籍大学等把握分）の合計（2016年3月発表）」

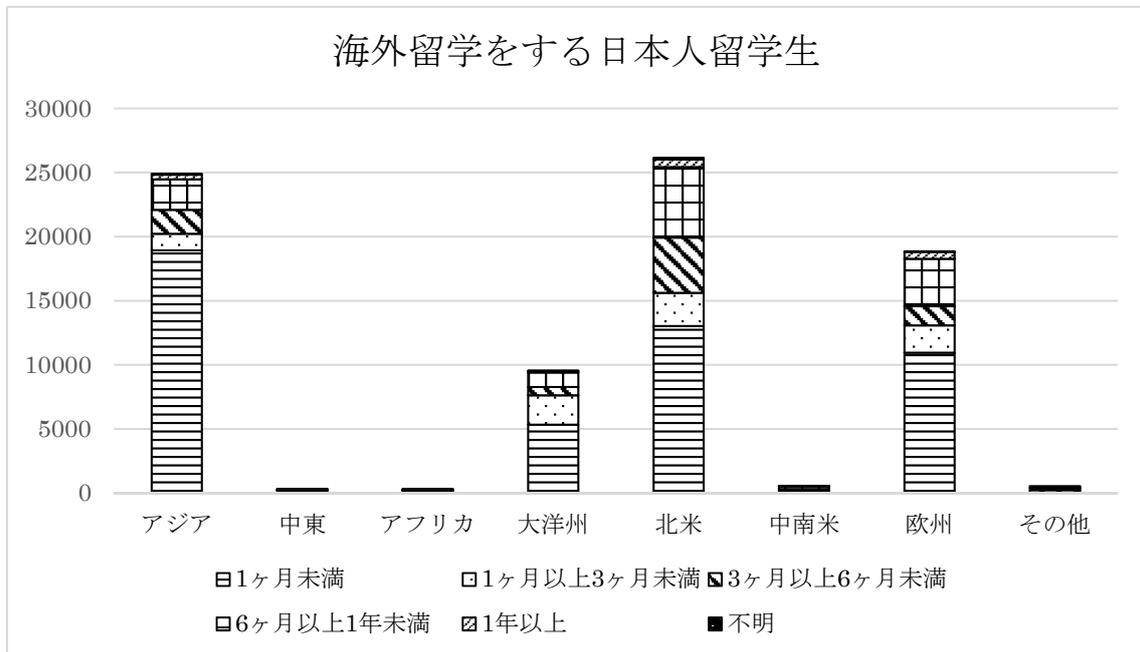


図1 海外留学をする日本人留学生数

(表1をグラフ化した)

第3節 海外留学の効果と問題点

海外留学をすることで、見聞が広がり物事を認識、理解する許容範囲が広がる。海外留学の意義については、先行研究から読み取ることができる。

文部科学省（2009）は、「個人としては、国際体験を通じた国際理解・知識の拡大、語学力の向上など学生の能力や可能性を広げ、留学を通じ国境を超えた幅広い人的ネットワークの形成につながる。また、国としても国際的な競争環境の中での国際的通用性のある人材の育成や受け入れと同様に人的ネットワークの形成による相互理解と友好関係の深化が世界の安定と平和に資するといった安全保障の観点、我が国大学等の教育研究水準の向上など重要な意味を持つものである」と述べている。

池田（2011）は、海外留学を経験した日本人学生への異文化に対する意識の調査の結果より、次のことを明記している。

(1) 抽象的なイメージから具体化したイメージへと変化している

外国に対してのイメージが具体的に自身の経験に基づいたものへととなっている。

(2) 相反するイメージを持つようになる

画一的なステレオタイプではなく、個人差や多様性に目を向けるようになっていく。

(3) 対人関係のイメージが増えている

(4) 言語に対する意識の変化

留学前は、言語に対する不安要素が大きかったが、留学後はさほど重要だと認識していない。言語はコミュニケーションの手段としての認識になっている。

(5) 日本や日本人と比較した相対的なイメージが増える

この池田(2011)の見解について、筆者は、日本人留学生が母国を離れて異文化に触れながら、異国の土地で生活することは、まず自分の価値観（＝日本の常識、日本人の特徴、日本人の生活の特性など）において気づきを得ることだと考える。特に今日まで当たり前のように生活できていたことができないという困難さに向き合うことになる（例：ルームシェア、宗教の違い、文化の違い等）。しかし、異国での生活に慣れると次は共通点を探

求できるようになる。これらの相違点を見つけた上で、それぞれのアイデンティティや海外で生活する力を獲得できるようになり、それが成長という形で自信に繋がると考える。

これらの海外留学経験を持つ学生の意識の変化より、「留学によって、異文化理解が高まり、主体性や実行力も高まった（池田（2011））」ことが明らかにされている。

しかし、その反面、学生の内向き志向が目立っている。

「経済的理由や、就職活動の開始時期、留学先で修得した単位を卒業単位として認めていない大学もあるため帰国後に留年せざるを得ないこと等のシステムの問題が海外留学の阻害要因となっている（経済産業省（2010））」

特に、学生自身はやはり日本での生活に基盤を置いて人生設計を立てている傾向があることから、海外留学に最も適している期間と就職活動時期が重なってしまい、4年間で卒業できないことが原因で長期留学をする意欲が阻止されてしまっている。

さらに、在籍する大学内の交換留学プログラムで海外留学をしない、あるいはできない学生の場合、休学して私費留学を行う傾向も多く見られている。その場合、学生は、休学していながらも学費を一部大学に納金するため、経済的負担もさらにかかることになる。

海外留学における効果と問題点が存在しているが、それでも留学の重要性が唱えられている当世で、海外留学を促進する制度が整備される必要があると考えられる。

第4節 日本人の海外留学を促進するための課題

文部科学省（2009）は、「自大学等の学生の海外留学の促進は、大学等にとっても、双方向の相互交流に基づく大学等間の交流の拡大や（中略）日本の高等教育機関の海外展開に活用することもできるなど得るものは大きく、一部の大学では学部段階の一定期間留学を義務づけるといったところもみられる」と海外留学の必要性を明確にしている。

さらに、大学等においては、外国語教育、特に英語教育の充実化に伴い、単位互換やダブルディグリー（*1）等の留学プログラムに変更し、学生の緊急時の連絡体制やセーフティネットの確立も求められる。また、大学外の企業等も含め、海外留学が将来の進学・就職に十分な優位があることを明示し、留学しやすい環境整備、就職時の進路指導の強化等を積極的に展開することが必要であると述べている。

また、留学未経験の学生への海外留学促進制度として、河合（2009）は、①入学後の早い時期に留学に関する情報を提供すること、②学生の留学思考、学部・院生、文系・理系などの違いに応じた支援を整備すること、③学生の外国語能力を高めるための対策を講じること、④留学に対する明確な動機をもてるように、留学生との共学の機会を充実させたり、海外留学を卒業要件に入れたりといった学内での国際化整備をより強化することを提案している。

岩城・野水（2010）は、就職活動や経済的理由により海外留学を諦める学生への促進制度として、①留学に関する情報を周知し、留学を実現するための行動をおこせるようなきっかけをつくること、②単位互換を円滑に進められるような制度をつくる、留学経験者の学生との交流を設けるといった学内の環境を整備することで、留学を実現できるように支援すること、③外国語運用能力を高めるための教育プログラムを整備すること、④留学のための大学独自の奨学金制度を充実させることを提案している。

さらに、海外留学経験のある学生の変化より、池田（2011）は、①長期間でキャリアを見つめた際、留学経験がいかにより有利に働くかといった留学のメリットを提示すること、②留学生との交流、短期留学プログラムを充実させ、学生が学外に目を向けるきっかけを大学がつくること、③学生のニーズにあった留学プログラムを提供することを提案している。

上記は、全て日本人大学生という大きな枠組みで述べられたものであり、本研究の対象者である大学に在籍する聴覚障害学生の現状把握は極めて困難である。次章では、聴覚障害学生の海外留学の現状把握について述べる。

(*1) ダブルディグリー：欧州と中国でよく見られる制度。欧州の定義は、「学生は（少なくとも）二つの高等教育機関で学修プログラムを修了した時点で、関係教育機関それぞれから独立した学位記を受け取る」としている。

第2章 聴覚障害学生の海外留学

第1節 聴覚障害学生の海外留学の現状

まず、前章と同様に日本学生支援機構より、大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学数を検索してみたが、掲載されていたのは、高等教育機関内での支援、配慮事例（授業、試験、就職、学外実習等）であり、海外留学に関する情報並びに聴覚障害学生の海外留学支援についての内容は見られなかった。

そこで、現在、聴覚障害学生、聴覚障害者が多く派遣されている公益財団法人ダスキン愛の輪基金とNPO法人日本ASL協会の聴覚障害学生数が掲げた聴覚障害学生の海外留学の現状を以下に挙げる。

公益財団法人ダスキン愛の輪基金「ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業」は、この事業の目的を以下のように述べている。

「ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業」は1981年、国連で決議された「国際障害者年」にちなみ、障がい者の社会への完全参加と平等の実現を目指して発足しました。障がいのある人を対象とする海外研修派遣制度として、国内外に広く知られています。この事業は、地域社会のリーダーとして貢献したいと願う障がいのある若者の、海外で実地研修していただくものです。」

また、1982年から派遣を行っており、今日までで多くの障害者が海外留学を経験している。その中でも、聴覚障害者は99名が海外留学を行っている。さらに、大学に派遣された聴覚障害者で見ると、30名であった(*1)。主な留学派遣国は、アメリカ合衆国、イギリス、ニュージーランド、ドイツ、オーストラリア、フランス、フィジー、イタリア、フィンランド、ロシアである。また、留学期間は5ヶ月間～1年間である。

一方、NPO法人ASL協会「聴覚障害者海外奨学金事業」は、事業目的を次のように述べている。

「日本及びアジア諸国の聴覚障害児・者のために、信念をもって米国の大学等へ留学して学び、帰国後にその留学経験を各分野に生かし、活動してくださる熱意のある聴覚障害

者を募集し、留学支援を行っています。留学先は、米国の聴覚障害者受け入れ体制の整っている高等教育機関（大学、大学院、短大など）。」

この事業は、2004年から留学奨学生への派遣を行っており、2016年度までで計28名の派遣をしている。主な留学先の大学は、ギャロデット大学・大学院、オーロニ大学、ロチェスター工科大学／国立聾工科大学、サンタクララ大学大学院、ボストン大学大学院、カリフォルニア州立大学チコ校である。さらに、留学期間は、約3年～8年である。しかし、2016年度より、留学先に聴覚障害者の受け入れ体制が整っている機関が追加され、更に、留学期先形態と期間については、大学又は大学院の学位取得を目指す学生においては最長5年、特別生（聴講生）や実習での留学においては最長1年が追加の制定が行われた。

上記のように、聴覚障害学生の海外留学手段は公益財団と法人団体の事業による制度である。聴覚障害学生が大学に在籍しており、これらの事業から海外留学をする場合、海外留学費（生活費を除く）に対する不安はあまり強くないと想像できるが、就職活動及び就職時期の遅延、単位互換制度の整備不十分による留年確定、さらに自分が在籍している大学を休学、退学することが条件となってしまう。今日までで大学の協定校への交換留学による制度で海外留学をした聴覚障害学生の事例は見られない。

さらに、これまで健聴大学生の海外留学に対する意識についての研究（岩城ら（2010）、池田（2011））は散見されたが、聴覚障害学生の海外留学に対する意識について先行研究が見られなかった。このことから、現在大学に在籍する聴覚障害学生が海外留学に対してどのような意識を持っているのか、また留学意志はあるのか、さらに聴覚障害を有するが故の特有の問題があるのかを把握することが必要である。また、海外留学経験を有する聴覚障害者から留学時にどのような経験をし、何を学んだのか、困難な場面はどのような時だったのか等を調査し、大学を休学せずに在籍している大学から海外留学できる制度の構築に向けた検討を行う必要がある。

(*1) : ダスキン障害者リーダー育成海外研修の派遣対象者は、18歳～35歳程度である。99名の中には、コミュニティカレッジやろう学校、オフィス、センター等への派遣も多いが、本研究の意図から大学へ派遣された人数を提示した。

第 2 部 本論

第3章 本研究の目的・構成

第1節 本研究の目的と構成

これまで、聴覚障害学生の海外留学に関する先行研究は見られない状況から、聴覚障害学生の海外留学についてあまり探求されていない。第1部では、日本人留学生という範囲内で留学生数や実態を把握することができたが、聴覚障害を有する大学生においては、その数値は把握できても、実際に海外留学中に障害が故に困り感があったか、海外留学を経験してどのような変化が見られたのかなどの把握までは到達しなかった。

そこで、本研究では聴覚障害学生が海外留学に対してどのような意識を持っているのかについて以下のことを明らかにする。

- ・聴覚障害学生の海外留学に対する意識を質問紙調査にて把握する。海外留学に対する期待や不安感にどのようなものがあるか。また、それは海外留学を希望する理由に相关联しているのか。

さらに、実際に海外留学経験を有する聴覚障害者へ面接調査を行う。

- ・留学当時に何を体験したのか、またその経験から何を得たのか。
- ・問題があった場合、どう対処したのか。
- ・今後に向けてどのような要望があるのか。

以上のことを明らかにし、海外留学の現状把握と課題点を探求し、これらの調査結果を基に大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学支援体制の在り方を検討していく。

第2節 研究方法

1. 質問紙調査

海外留学に対する意識調査について、海外留学に期待する点、不安に感じる点、また今日までの語学学習方法、及び海外渡航や外国人との交流経験の有無等で質問紙による調査を行う。その上で、聴覚障害学生が海外留学を考える際に「今是非留学したい」に高い相関を示す要因（質問項目）が何かを把握する。また、聴覚障害学生が海外留学に対して不安に思う要因が何かを把握する。

2. 面接調査

面接対象者用の質問を作成するにあたり、質問紙調査で得られた結果に基づいたカテゴリー分類を行い、質問項目を作成する。さらに、海外留学の現状把握と課題点の探求を目的に海外留学経験のある聴覚障害者を対象に面接調査を行う。

調査手順は、海外留学の経験を持つ聴覚障害者へ面接調査を依頼し、半構造化面接法(*1)で行う。また、面接時間は、一人あたり約60分である。記録は、面接時に面接対象者（聴覚障害者）の手話による発言を面接者（筆者）が読み取り、その場で記録し、面接対象者と内容を確認しながら進行する方法である。

(*1) 半構造化面接法とは、あらかじめ仮説を設定し、質問項目も決めておくが会話の流れに応じ、質問の変更や追加を行い、自由な反応を引き出すものである。

第4章 聴覚障害者・学生への海外留学支援に関する調査

第1節 大学に在籍する聴覚障害学生への質問紙調査

1. 目的

現在、大学に在籍する年齢20歳以上の聴覚障害学生に対して、全52問の質問紙調査を行った。全52問中48問（5段階評価）から聴覚障害学生が海外留学を希望する強い理由が何かを把握する。また、聴覚障害学生が海外留学に対して不安に思う要因が何かも明らかにし、学生の不安を取り除く支援体制の課題点を探求していく。

2. 方法

調査対象者は、一般大学に在籍する聴覚障害学生を含む110名（内訳、男性：64名、女性：46名）であった。質問紙調査回収率は100%であった。

まず、聴覚障害学生支援や一般大学に在籍する健聴学生の海外留学に対する意識調査等に関する先行研究を参考に、(1)聴覚障害者の諸問題、(2)聴覚障害を有することで想定される海外留学先で考えられる諸問題についての項目をまとめた。諸問題は全6項目で構成した。（表2-1~2-6参照）

この6項目の諸問題から聴覚障害学生への海外留学に対する意識を調査する質問内容を作成した。全52問の内、48問は5段階評価での回答方法、4問は自由記入回答による方法である。5段階評価の回答方法は、「よく当てはまる」を5、「少し当てはまる」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり当てはまらない」を2、「まったく当てはまらない」を1とした。また、回答時に聴覚障害学生が回答した内容からの誘導回答を防ぐため、積極的な質問項目と消極的な質問項目は順不同に列記した。（表3参照）

さらに、48個ある質問項目の中でいくつかのカテゴリーのグルーピングを行い、各カテゴリーから問48「今、是非留学したい」の決定的要因を探求した。カテゴリーは以下のよう

(1)人間関係（交流）、(2)語学力、(3)就職、(4)情報保障、(5)A 生活体験（教育機関）、(5)B 生活体験（日常生活）、(6)A 学問（専門性の追求）、(6)B 学問（体験・学習）、(7) 期間、(8)大学からの提供、(9)補聴機器関連、(10)聴覚障害理解

また、本調査の質問項目には「～が不安である」といった内容も含んでいる。「今、是非留学したい」という気持ちを躊躇させている要因も明らかにしていく。

問 48「今、是非留学したい」を除いた 47 問の質問項目はカテゴリー化した 10 個のグループのいずれかに該当するため、それぞれのカテゴリー名と番号を振り与えた。（表 4 参照）さらに、SPSS for Windows Ver.23 を用いて、問「今、是非留学したい」に高く相関する質問項目と低く相関する質問項目を把握するためにピアソンの相関係数の算出とを因子分析（主因子法、バリマックス）を実施した。

質問紙内の回答記入のない箇所は、「まったく当てはまらない」に該当させ、「～が不安である」の質問項目は、消極的質問項目であることから点数を逆算させ検定を行った。

また、本調査は筑波技術大学研究倫理委員会より承認を得た上で行ったものである。
(平成 27 年 10 月 29 日)

表 2-1 聴覚障害者の諸問題

① 聴覚障害やコミュニケーションの理解について（生活支援・教育支援）

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 耳がきこえない、きこえにくい ➤ 補聴器を使用することから起きてしまう社会の誤解 ➤ 語学習得に時間がかかる ➤ きこえているのかいないのかなど誤解を受けやすい ➤ 人の輪の中に入りにくい ➤ 何度も繰り返し聞き返し嫌がられる ➤ 大きな声で話してしまう ➤ 大きな音を出してしまう ➤ 聴覚障害者同士で集まって独自の世界を作ってしまう ➤ 社会に対してマイナス思考 ➤ コミュニケーション方法 ➤ 障害認識 ➤ 障害に対する配慮、啓発 ➤ 言語権の確立 ➤ 聴覚障害者としてのアイデンティティ 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 言葉が通じない ➤ 聞き取れない ➤ 読み取れない ➤ 疎外感、孤立感 ➤ 現地手話や現地言語の習得必須 ➤ 国内・国外での海外留学手続き ➤ コミュニケーション能力 ➤ 異国に自分一人 ➤ ホームシックにかかる ➤ ホームステイ先での交流 ➤ 学内での友人関係構築 ➤ 補聴器の相談場所の獲得 ➤ 精神面の鍛え ➤ 自主活動参加が可能か ➤ 日本人としてのアイデンティティ ➤ 聴覚障害者*としてのアイデンティティ <p>*注：ろう・難聴者を意味する</p>

表 2-2 聴覚障害者の諸問題

② 手話言語についての理解について

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 聴覚障害者の社会参加の向上や社会的自立を目指す ➤ 日本国内での手話の言語学世界での位置づけ ➤ 手話によるコミュニケーションの権利・保証の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 現地の手話言語習得の必須性 ➤ ASL と BSL の違い ➤ 各国の手話の違い ➤ 国によって手話が公用化されているか

表 2-3 聴覚障害者の諸問題

③ 社会保障・社会福祉の諸制度の理解について

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 障害者差別解消法における行政サービス分野の合理的配慮 ➤ 手話通訳者の確保 ➤ 要約筆記支援団体等の確保 ➤ 手話言語条例を制定した地域のサービスの実態 ➤ ピアカウンセラー ➤ 各障害レベルに合わせた講習会開講 ➤ 障害者年金制度 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 奨学金制度 ➤ 障害者理解の有無 ➤ 通訳者の確保 ➤ 生活保障制度の有無 ➤ 在住登録や障害者関連の登録等の有無 ➤ 障害者関連の法律や制度の有無

表 2-4 聴覚障害者の諸問題

④ 聴覚障害児教育・外国語教育についての理解について

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ どのような教育を受けてきたか ➤ 幼児期からの教育内容 ➤ 子どもの学力レベルの差 ➤ 言葉のネットワーク不足（語彙力、文法力 etc. …） ➤ 語学検定での配慮 ➤ 語学習得順序 （日本語→英語）、 （日本語＝英語の同時進行） 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 海外を意識し始めた年齢 ➤ いつから外国語学習を始めたか ➤ 日本で準備したものがいかに発揮できるか ➤ 語学検定結果と実際の能力の差 ➤ 異文化理解

表 2-5 聴覚障害者の諸問題

⑤ 医療と聴覚障害者の暮らしについて

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 障害者手帳 ➤ 受付・外来・薬局での呼び出し ➤ 意思疎通問題からの誤診 ➤ 患者の不安が増す 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 保険が効かない治療費の高額さ (人工内耳は保険が効く) ➤ 受付・外来・薬局での呼び出し ➤ 意思疎通問題からの誤診 ➤ 患者の不安が増す <p>※米国の各州における補聴器サービスについて状況を確認予定</p>

表 2-6 聴覚障害者の諸問題

⑥ 高等教育（大学支援）について

聴覚障害者の諸問題	海外留学での諸問題
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 一般大学での情報保障の少なさ ➤ 一般大学での情報保障の対応の限界 ➤ 支援コーディネーターの少なさ ➤ 大学内での学生の存在 ➤ 友人関係 ➤ 就職活動 ➤ キャリア発達 ➤ 自立精神の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 単位獲得 ➤ 留学期間 ➤ 就職活動との兼ね合い ➤ コミュニケーション方法・能力 ➤ ホストファミリー・寄宿舍内での関係性 ➤ 友人関係 ➤ 学内生活 ➤ 授業についていく ➤ 異文化理解 ➤ 志望大学先の情報保障 ➤ 支援者（コーディネーター、AA、チューター）の有無 ➤ 希望する学科の有無 ➤ 研究者 or 職業者の学位の取得（キャリア発達）

表 3 質問紙の内容

1. 現地の手話を学んでみたい。
2. 現地の言語を学んでみたい（手話を除く）
3. 自分の語学力が不安である。
4. 学士・修士・博士号を取りたい。
5. 資格（カウンセラー等）を取りたい。
6. 留学先で専門的な講義を受けてみたい。
7. 留学先で専門的な研究がしてみたい。
8. 新たな世界を知るために行きたい。
9. 留学先の日常の様子が知りたい。
10. 半年～1年間の留学がしたい。
㊦ここでは、留学先の教育機関から半年以上修学期間として正規登録が認められた場合を留学としています。
11. 3年以上の留学がしたい。
12. 留学費用に対して不安がある。
13. 留学先の語学学校／専門学校／大学生活が不安である。
14. 留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるか不安である。
15. 様々な国のろう・難聴者と関わりたい。
16. 留学先の国のろう・難聴者と関わりたい。
17. コミュニケーションが取れるか不安である。
18. スピーキングが不安である。
19. リスニングが不安である。
20. リーディングが不安である。
21. ライティングが不安である。
22. ろう・難聴に関する福祉・公共サービスがあれば行きたい。
23. 補聴器・人工内耳のアフターケアが可能であれば行きたい。
24. 将来、就職に活かしたい。
25. 留学することで就職活動に影響が出ないか不安である。
26. 海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけたい。
27. 留学先の大学の情報保障に対して不安がある。
28. ノートテイク支援が提供されているならば行きたい。
29. パソコンテイク支援が提供されているならば行きたい。
30. 手話通訳（留学先の手話）派遣が提供されているならば行きたい。

31. 海外生活の体験がしてみたい。
32. 異文化体験（ホームステイ等…）をしてみたい。
33. 留学先の治安に対して不安がある。
34. 留学先の大学内での支援コーディネーターがいれば行きたい。
35. ろう・難聴に関する理解があれば行きたい。
36. 大学（又は、コーディネーター）がきちんと情報提供をしてくれるなら行きたい。
37. 人間関係（友人作り、先生との会話、ホストファミリーとの関係等…）に不安がある。
38. ホームシックになるか不安がある。
39. 食事が合うか不安である。
40. 留学前の手続き（ビザ取得のための大使館面接等…）が不安である。
41. 入国時の手続き（外国人登録等…）が不安である。
42. 大使館とのやり取り（パスポート紛失時等…）が不安である。
43. 将来、海外で暮らせるようになりたい。
44. 公共の生活内で情報保障が充実化しているならば行きたい。
45. 日本の留学事務局と現地の事務局の連携がきちんと取れるならば行きたい。
46. 補聴器・人工内耳の調整やサービスの対応があるならば行きたい。
47. 公共場面における障害のある人へのサービスが充実しているならば行きたい。
48. 今、是非留学したい。
49. どのようにして外国語を勉強してきましたか。（自由記入回答）
50. それはどの外国語ですか。（自由記入回答）
51. いつ海外留学してみたいと考えましたか。（自由記入回答）
52. 今までに国際交流を経験したことがありますか。例：日本国内での交流、海外旅行、海外研修等…。国名も記入。（自由記入回答）

表 4 質問項目とカテゴリー名の統合早見表

カテゴリー名	番号	質問内容
(1)人間関係(交流)	1	様々な国の聾・難聴者と関わりたい
	2	留学先の国の聾・難聴者と関わりたい
	3	コミュニケーションが取れるか不安である
	4	大学(又は、コーディネーター)がきちんと情報提供をしてくれるなら行きたい
	5	人間関係(友人作り、先生との会話、ホストファミリーとの関係等…)に不安がある
(2)語学力	1	現地の手話を学んでみたい
	2	現地の言語を学んでみたい(手話を除く)
	3	自分の語学力が不安である
	4	スピーキングが不安である
	5	リスニングが不安である
	6	リーディングが不安である
	7	ライティングが不安である
(3)就職	1	将来、就職に活かしたい
	2	留学することで就職活動に影響が出ないか不安である
	3	海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけたい
(4)情報保障	1	聾・難聴に関する福祉・公共サービスがあれば行きたい
	2	留学先の大学の情報保障に対して不安がある
	3	ノートテイク支援が提供されているならば行きたい
	4	パソコンテイク支援が提供されているならば行きたい
	5	手話通訳(留学先の手話)派遣が提供されているならば行きたい
	6	留学先の大学内での支援コーディネーターがいれば行きたい
	7	大学(又は、コーディネーター)がきちんと情報提供をしてくれるなら行きたい
	8	公共の生活内で情報保障が充実化しているならば行きたい
(5)A生活体験(教育機関)	1	留学先の語学学校/専門学校/大学生活が不安である
	2	留学先の語学学校/専門学校/大学生活において、授業についていけるか不安である
B生活体験(日常生活)	1	留学先の日常の様子を知りたい
	2	海外生活の体験がしてみたい
	3	異文化体験(ホームステイ等…)をしてみたい
	4	留学先の治安に対して不安がある
	5	ホームシックになるか不安である
	6	食事が合うか不安である
	7	将来、海外で暮らせるようになりたい
(6)A学問(専門性の追求)	1	学士・修士・博士号を取りたい
	2	資格(カウンセラー等)を取りたい
	3	留学先の語学学校/専門学校/大学生活が不安である
	4	留学先の語学学校/専門学校/大学生活において、授業についていけるか不安である
B学問(体験・学習)	1	現地の手話を学んでみたい
	2	現地の言語を学んでみたい(手話を除く)
	3	留学先で専門的な講義を受けてみたい
	4	留学先で専門的な研究がしてみたい
	5	新たな世界を知るために行きたい
	6	留学先の語学学校/専門学校/大学生活が不安である
	7	留学先の語学学校/専門学校/大学生活において、授業についていけるか不安である
(7)期間	1	半年~1年間の留学がしたい
	2	3年以上の留学がしたい
(8)大学からの提供	1	留学費用に対して不安がある
	2	留学前の手続き(ビザ取得のための大使館面接等…)が不安である
	3	入国時の手続き(外国人登録等…)が不安である
	4	大使館とのやり取り(パスポート紛失時等…)が不安である
	5	日本の留学事務局と現地の事務局の連携がきちんと取れるならば行きたい
(9)補聴機器関連	1	補聴器・人工内耳のアフターケアが可能であれば行きたい
	2	補聴器・人工内耳の調整やサービスの対応があるならば行きたい
(10)聴覚障害理解	1	聾・難聴に関する福祉・公共サービスがあれば行きたい
	2	補聴器・人工内耳のアフターケアが可能であれば行きたい
	3	聾・難聴に関する理解があれば行きたい
	4	公共場面における障害のある人へのサービスが充実しているならば行きたい

3. 留学意欲の要因に関する相関係数の結果及び考察

「今、是非留学したい」という質問に対して、「よく当てはまる」は 14 名、「少し当てはまる」は 26 名、「どちらともいえない」は 31 名、「あまり当てはまらない」は 10 名、「まったく当てはまらない」は 29 名だった。

「今、是非留学したい」にやや高い相関を見せた質問項目は、上位から「半年～1年間の留学がしたい」「異文化体験（ホームステイ等・・・）をしてみたい」「3年以上の留学がしたい」「海外生活の体験がしてみたい」「将来、海外でも暮らせるようになりたい」「海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけたい」「留学先の大学で支援コーディネーターがいれば行きたい」「現地の手話を学んでみたい」「留学先で専門的な研究がしてみたい」「新たな世界を知るために行きたい」「日本の留学事務局と現地の事務局の連携がきちんと取れるならば行きたい」「留学先の国のろう・難聴者と関わりたい」「留学先で専門的な講義を受けてみたい」「留学先の日常の様子が知りたい」「将来、就職に活かしたい」「現地の言語を学んでみたい（手話を除く）」の 16 項目だった。

(*1): 本調査では、問 48「今、是非留学したい」との相関について、相関係数 0.5～0.6 以上を相関が高いとし、相関係数 0.4 以上を相関がやや高いとした。

(*2)手話: 本研究における手話の定義は、言語としての手話である。

(*3): 相関係数-0.3～-0.2 をやや低い相関とした。

表5 「今、是非留学したい」との相関(*1)

カテゴリー名	質問内容	相関
期間	「半年～1年間の留学がしたい」	.614
生活体験（日常生活）	「異文化体験（ホームステイ等…）をしてみたい」	.528
期間	「3年以上の留学がしたい」	.513
生活体験（日常生活）	「海外生活の体験がしてみたい」	.496
生活体験（日常生活）	「将来、海外で暮らせるようになりたい」	.485
就職	「海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけた い」	.463
情報保障	「留学先の大学内で支援コーディネーターがいれば行きたい」	.456
語学力／学問（体験・学 習）	「現地の手話を学んでみたい」	.455
学問（体験・学習）	「留学先で専門的な研究がしてみたい」	.449
学問（体験・学習）	「新たな世界を知るために行きたい」	.448
大学からの提供	「日本の留学事務局と現地の事務局の連携がきちんと取れるならば 行きたい」	.448
人間関係（交流）	「留学先の国のろう・難聴者と関わりたい」	.436
学問（体験・学習）	「留学先で専門的な講義を受けてみたい」	.435
生活体験（日常生活）	「留学先の日常の様子が知りたい」	.419
就職	「将来、就職に活かしたい」	.410
語学力／学問（体験・学 習）	「現地の言語を学んでみたい（手話を除く）」	.409

さらに、各カテゴリー別に「今、是非留学したい」との相関行列を行った。ここでは、各カテゴリーで、高い相関と低い相関が見られた質問項目が何かを探求した。

表 6-1 (1)人間関係 (交流)

相関行列							
		人間関係1	人間関係2	人間関係3	人間関係4/ 情報保障7	人間関係5	質問4 8
相関	人間関係1	1.000	.881	-.219	.621	-.249	.348
	人間関係2	.881	1.000	-.339	.641	-.376	.436
	人間関係3	-.219	-.339	1.000	-.311	.416	-.108
	人間関係4/ 情報保障7	.621	.641	-.311	1.000	-.366	.330
	人間関係5	-.249	-.376	.416	-.366	1.000	-.090
	質問4 8	.348	.436	-.108	.330	-.090	1.000

カテゴリー「人間関係 (交流)」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、人間関係2「留学先の国のろう・難聴者と関わりたい」であった。人間関係1「様々な国のろう・難聴者と関わりたい」と人間関係4/情報保障7「大学 (又は、コーディネーター) がきちんと情報提供をしてくれるならば行きたい」は、本調査の相関の定義数を下回るが、聴覚障害学生が自分の大学で受けている情報保障が基盤にあることが推測可能なことから、この相関係数が見られたと推察した。

表 6-2 (2)語学力

		相関行列							
		語学力1/学問 B1	語学力2/学問 B2	語学力3	語学力4	語学力5	語学力6	語学力7	質問4 8
相関	語学力1/学問 B1	1.000	.460	-.267	-.145	-.181	-.205	-.240	.455
	語学力2/学問 B2	.460	1.000	-.230	.052	.016	.078	.001	.409
	語学力3	-.267	-.230	1.000	.290	.211	.446	.366	-.047
	語学力4	-.145	.052	.290	1.000	.779	.566	.436	-.070
	語学力5	-.181	.016	.211	.779	1.000	.518	.391	-.075
	語学力6	-.205	.078	.446	.566	.518	1.000	.786	-.151
	語学力7	-.240	.001	.366	.436	.391	.786	1.000	-.162
	質問4 8	.455	.409	-.047	-.070	-.075	-.151	-.162	1.000

カテゴリー「語学力」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、語学力1「現地の手話を学んでみたい」であった。また、「現地の言語を学んでみたい（手話を除く）」もこのカテゴリー内で2番目に高い相関が見られたことから、語学学習への意欲が強いことが窺えた。

質問回答内で、リスニングへの不安に対する無回答が数名いた。これは、「きこえない」ことが不安という考えではなく、音声言語による聴取理解経験を持たない先天性や幼少期失聴によるもので「きこえる」が何かがわからないことから無回答を選択した可能性が考えられる。

表 6-3 (3)就職

相関行列					
		就職1	就職2	就職3	質問48
相関	就職1	1.000	-.269	.594	.410
	就職2	-.269	1.000	-.244	-.057
	就職3	.594	-.244	1.000	.463
	質問48	.410	-.057	.463	1.000

カテゴリー「就職」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、就職3「海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけたい」、就職1「将来、就職に活かしたい」であった。

海外留学したことを就職に活かしたい意識も見られるが、それ以上に海外留学経験を自分自身の自信に変えたいと思った背景を探求する必要がある。

表 6-4 (4)情報保障

		相関行列								
		情報保障1/聴覚障害理解1	情報保障2	情報保障3	情報保障4	情報保障5	情報保障6	人間関係4/情報保障7	情報保障8	質問 4 8
相関	情報保障1/聴覚障害理解1	1.000	-.531	.592	.572	.549	.698	.696	.663	.282
	情報保障2	-.531	1.000	-.519	-.556	-.474	-.508	-.556	-.465	-.093
	情報保障3	.592	-.519	1.000	.915	.640	.585	.641	.608	.254
	情報保障4	.572	-.556	.915	1.000	.641	.546	.663	.627	.211
	情報保障5	.549	-.474	.640	.641	1.000	.590	.609	.533	.338
	情報保障6	.698	-.508	.585	.546	.590	1.000	.764	.668	.456
	人間関係4/情報保障7	.696	-.556	.641	.663	.609	.764	1.000	.646	.330
	情報保障8	.663	-.465	.608	.627	.533	.668	.646	1.000	.356
	質問 4 8	.282	-.093	.254	.211	.338	.456	.330	.356	1.000

カテゴリー「情報保障」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、情報保障 6「留学先の大学内で支援コーディネーターがいれば行きたい」であった。日本の大学には、障害学生支援室が設立され始め、大学によっては、専任のコーディネーターが在勤しているところもあることから、聴覚障害学生にとってもコーディネーターの存在は強く、また、コーディネーターがいることで情報保障のニーズの検討、講義や大学生活における相談が可能であることから心理的安定が図られることが考えられる。

相関が低い質問項目は、情報保障 8「公共の生活内で情報保障が充実しているならば行きたい」、情報保障 5「手話通訳（留学先の手話）派遣が提供されているならば行きたい」、情報保障 7「大学（又は、コーディネーター）がきちんと情報提供をしてくれるならば行きたい」、情報保障 1「ろう・難聴に関する福祉・公共サービスがあれば行きたい」、情報保障 3「ノートテイク支援が提供されているならば行きたい」、情報保障 4「パソコンテイク支援が提供されているならば行きたい」であった。情報保障の中でも、手話通訳による支援について相関が最も高く見られた。これは、手話をコミュニケーション手段の軸としている聴覚障害学生の割合が多かったことが推測できるが、情報保障手段の選択理由として、個々のニーズを更に突き止める必要性が感じられた。

また、低い相関ではあるが、少数の聴覚障害学生であっても公共場面における情報保障や福祉・公共サービスの充実化も求められていることが明らかになった。留学先の国によっては障害者へのサービスが充実し、制度化されていることの周知も聴覚障害学生にとっては、留学先の選択においても貴重な情報となることが推察できた。

表 6-5 (5)A 生活体験（教育機関）

相関行列				
		生活体験A1／ 学問A3B6	生活体験A2／ 学問A4B7	質問 4 8
相関	生活体験A1／ 学問A3B6	1.000	.747	-.195
	生活体験A2／ 学問A4B7	.747	1.000	-.268
	質問 4 8	-.195	-.268	1.000

カテゴリー「A 生活体験（教育機関）」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目はなかった。

このカテゴリーは、質問内容が「～が不安である」であることから、5段階評価の点数を逆算したものを表出している。生活体験 A2「留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるか不安である」の方が、生活体験 A1「留学先の語学学校／専門学校／大学生活が不安である」より、不安の度合いが高いと言える。つまり、留学先での授業に不安があり、留学を躊躇していると考えられる。

しかし、「授業についていけるか不安である」といっても、学生が学びたい分野の講義内容に対しての不安か、留学先の言語の対しての不安かは明確にされていないことから、更に詳細を把握する必要があると考える。

表 6-6 (5)B 生活体験（日常生活）

		相関行列							
		生活体験B1	生活体験B2	生活体験B3	生活体験B4	生活体験B5	生活体験B6	生活体験B7	質問 4 8
相関	生活体験B1	1.000	.602	.655	-.027	-.055	-.017	.180	.419
	生活体験B2	.602	1.000	.724	-.106	-.113	-.107	.200	.496
	生活体験B3	.655	.724	1.000	-.106	.035	-.042	.284	.528
	生活体験B4	-.027	-.106	-.106	1.000	.255	.502	.093	.017
	生活体験B5	-.055	-.113	.035	.255	1.000	.352	.077	.091
	生活体験B6	-.017	-.107	-.042	.502	.352	1.000	.127	.046
	生活体験B7	.180	.200	.284	.093	.077	.127	1.000	.485
	質問 4 8	.419	.496	.528	.017	.091	.046	.485	1.000

カテゴリー「B 生活体験（日常生活）」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、生活体験 B3「異文化体験（ホームステイ等…）をしてみたい」、生活体験 B2「海外生活の体験がしてみたい」、生活体験 B7「将来、海外で暮らせるようになりたい」、生活体験 B1「留学先の日常の様子が知りたい」であった。

本カテゴリー内では、日本国内ではあまり経験ができない体験に興味があることが明らかとなった。また、これらの結果より聴覚障害学生においては海外生活における不安要素はあまりないということが推察された。

表 6-7 (6)A 学問 (専門性の追求)

相関行列						
		学問A1	学問A2	生活体験A1/ 学問A3B6	生活体験A2/ 学問A4B7	質問 4 8
相関	学問A1	1.000	.655	-.092	-.041	.210
	学問A2	.655	1.000	-.093	-.013	.298
	生活体験A1/ 学問A3B6	-.092	-.093	1.000	.747	-.195
	生活体験A2/ 学問A4B7	-.041	-.013	.747	1.000	-.268
	質問 4 8	.210	.298	-.195	-.268	1.000

カテゴリー「A 学問 (専門性の追求)」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目はなかった。

一方、学問 A2「資格 (カウンセラー等) を取りたい」と学問 A1「学士・修士・博士号を取りたい」については、相関は見られなかった。

表 6-8 (6)B 学問 (体験・学習)

		相関行列							
		語学力1/学問 B1	語学力2/学問 B2	学問B3	学問B4	学問B5	生活体験A1/ 学問A3B6	生活体験A2/ 学問A4B7	質問48
相関	語学力1/学問 B1	1.000	.460	.497	.415	.508	-.316	-.428	.455
	語学力2/学問 B2	.460	1.000	.479	.426	.525	-.282	-.309	.409
	学問B3	.497	.479	1.000	.806	.480	-.316	-.325	.435
	学問B4	.415	.426	.806	1.000	.459	-.289	-.285	.449
	学問B5	.508	.525	.480	.459	1.000	-.402	-.476	.448
	生活体験A1/ 学問A3B6	-.316	-.282	-.316	-.289	-.402	1.000	.747	-.195
	生活体験A2/ 学問A4B7	-.428	-.309	-.325	-.285	-.476	.747	1.000	-.268
	質問48	.455	.409	.435	.449	.448	-.195	-.268	1.000

カテゴリー「B 学問 (体験・学習)」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、学問 B1「現地の手話を学んでみたい」、学問 B4「留学先で専門的な研究がしてみたい」、学問 B5「新たな世界を知るために行きたい」、学問 B3「留学先で専門的な講義を受けてみたい」、学問 B2「現地の言語を学んでみたい (手話を除く)」であった。

本調査より、語学学習の意欲が強く見られたのは、現地の手話(*2)の学習であった。これも前述したように、手話でコミュニケーションをしている聴覚障害学生の数が多かったことから推測できる。また、専門的な講義と研究への意欲においては、研究への興味の方が強かった。この結果の背景として、本調査の対象が年齢 20 歳以上の大学に在籍している聴覚障害学生という点から、学生が海外留学をするという想像をした際に大学院での修学と想定した可能性があるかと推測する。

また、2 つの学問のカテゴリーから、聴覚障害学生は学位や資格の取得より専門的な講義受講や研究、さらには語学学習を目的とした留学を望んでいることが明らかとなった。

表 6-9 (7)期間

相関行列				
		期間1	期間2	質問 4 8
相関	期間1	1.000	.477	.614
	期間2	.477	1.000	.513
	質問 4 8	.614	.513	1.000

カテゴリー「期間」では、期間 1「半年～1年以上の留学がしたい」、期間 2「3年以上の留学がしたい」の両質問項目に高い相関が見られた。現在の聴覚障害者の海外留学の現状から見ると、半年～1年以上は大学生の留学期間であり、3年以上は大学院の留学期間である。

興味深い点として、前述したカテゴリー「B 学問（体験・学習）」の学問 B4「留学先で専門的な研究がしてみたい」に高い相関が見られたのにも関わらず、期間 1「半年～1年以上の留学がしたい」の方が期間 2「3年以上の留学がしたい」よりも高い相関が見られた。考察をするにあたり、まず聴覚障害学生が「研究」をどのように解釈したかに着目した。研究といっても多種多様であり、基礎研究、実験研究、文献研究などがあり、また学生が修学したい分野や方法によっても大きく捉え方が異なり、回答結果がこのように出たと推察した。また、カテゴリー「学問 A（専門性の追求）」の学問 A「学士・修士・博士号を取りたい」が「今、是非留学したい」との相関があまり見られなかったことから、学問 B4「留学先で専門的な研究がしてみたい」が留学期間と学位取得に直接結びつかないことがいえる。

表 6-10 (8)大学からの提供

相関行列							
		大学からの提供1	大学からの提供2	大学からの提供3	大学からの提供4	大学からの提供5	質問 4 8
相関	大学からの提供1	1.000	.453	.453	.410	-.402	-.324
	大学からの提供2	.453	1.000	.874	.787	-.380	-.083
	大学からの提供3	.453	.874	1.000	.874	-.362	-.034
	大学からの提供4	.410	.787	.874	1.000	-.404	-.178
	大学からの提供5	-.402	-.380	-.362	-.404	1.000	.448
	質問 4 8	-.324	-.083	-.034	-.178	.448	1.000

カテゴリー「大学からの提供」の中で、「今、是非留学したい」とやや高い相関が見られた質問項目は、大学からの提供 5「日本の留学事務局と現地の事務局の連携がきちんと取れるならば行きたい」であった。このことは、聴覚障害学生が海外留学するにあたって、日本と海外現地の組織間連携を強く要望していることを示唆するものである。2つの機関の連携が充実且つ安定していることで聴覚障害学生も安心して留学できると考える。

表 6-11 (9)補聴機器関連

相関行列				
		補聴機器関連1 ／聴覚障害理 解2	補聴機器関連2	質問 4 8
相関	補聴機器関連1 ／聴覚障害理 解2	1.000	.685	.277
	補聴機器関連2	.685	1.000	.366
	質問 4 8	.277	.366	1.000

カテゴリー「補聴機器関連」の中で、「今、是非留学したい」にやや高い相関を見せた質問項目はなかった。しかし、補聴機器関連 2「補聴器・人工内耳の調整やサービスの対応があるならば行きたい」、補聴機器関連 1「補聴器・人工内耳のアフターケアが可能であれば行きたい」には低い相関が見られた。

これについては、補聴器・人工内耳を日本国内で装用している聴覚障害学生は多く見られるが、補聴器、人工内耳の利用目的がそれぞれに異なることが背景にあることが考えられる。また、本調査では補聴器・人工内耳の装用目的に関する調査は行っていないため、聴覚障害学生の補聴器の活用率は把握できていない。

表 6-12 (10)聴覚障害理解

相関行列						
		情報保障1／聴覚障害理解1	補聴機器関連1／聴覚障害理解2	聴覚障害理解3	聴覚障害理解4	質問 4 8
相関	情報保障1／聴覚障害理解1	1.000	.581	.703	.734	.282
	補聴機器関連1／聴覚障害理解2	.581	1.000	.519	.486	.277
	聴覚障害理解3	.703	.519	1.000	.751	.356
	聴覚障害理解4	.734	.486	.751	1.000	.397
	質問 4 8	.282	.277	.356	.397	1.000

カテゴリー「聴覚障害理解」の中で、「今、是非留学したい」にやや高い相関を見せた質問項目は見られなかった。しかし、聴覚障害理解 4「公共場面における障害のある人へのサービスが充実しているならば行きたい」、聴覚障害理解 3「ろう・難聴に関する理解があれば行きたい」、聴覚障害理解 1「ろう・難聴に関する福祉・公共サービスがあれば行きたい」、聴覚障害理解 2「補聴器・人工内耳のアフターケアが可能であれば行きたい」については、あまり相関は見られなかった。

しかしながら、少数ではあるがろう・難聴への理解を求めている聴覚障害学生が存在していることは否定できない。これより、海外留学及び大学内の海外留学制度に聴覚障害に関する配慮に向けた環境整備についても検討する必要があると考える。これについては、第 5 章にて述べる。

4. 留学意欲の要因に関する因子分析の結果及び考察

海外留学をしたいと思うことに対して、留学を決める大きな要因の因子として、因子行列から6つの因子が抽出された。

第1因子は、「パソコンノートテイク支援が提供されるならば行きたい」「公共の生活内で情報保障が充実しているならば行きたい」「ろう・難聴に関する理解があれば行きたい」「留学先の大学内で支援コーディネーターがいれば行きたい」といった10項目で構成されていることから、「情報保障」因子と命名した。第2因子は、「留学先の日常の様子が知りたい」「留学先で専門的な講義を受けてみたい」「半年～1年間の留学がしてみたい」といった6項目で構成されていることから、「意欲・期間」因子と命名した。第3因子は、「留学前の手続き（ビザ取得のための大使館面接等・・・）が不安である」「入国時の手続き（外国人登録等・・・）が不安である」といった3項目で構成されていることから、「大学からの支援」因子と命名した。第4因子は、「スピーキング、リスニング、ライティング、リーディングが不安である」といった4項目で構成されていることから、「語学力」因子と命名した。第5因子は、「留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるか不安である」といった3項目で構成されていることから、「留学生活に対する不安のなさ」因子と命名した。第6因子は、「学士・修士・博士号を取りたい」「資格（カウンセラー等）を取りたい」といった2項目で構成されていることから、「学問（専門性の追求）」因子と命名した。

因子分析の結果より、6つの因子が聴覚障害学生の海外留学の決断時に大きな要因としてあることが明らかとなった。特に、「情報保障」因子は、聴覚障害を有するが故の因子であった。このことから、聴覚障害学生が海外留学をする際に留学先の教育機関の情報保障の充実且つ安定を求めていることが考察できた。次に、「意欲・期間」因子と「学問（専門性の追求）」因子から、聴覚障害学生が海外留学を決断する際にどのような目的で留学をするのか、さらに、留学内容と留学期間を重要視していることが明らかとなった。海外留学目的を明確にするためにも多岐に渡る留学プログラムが必要であると考えられた。「大学からの支援」因子と「語学力」因子、さらに「留学生活に対する不安のなさ」因子については、「～が不安である」という質問項目であるため、消極的質問項目であることから点数を逆転させ、検定を行った。つまり、この3つの因子については、「～が不安ではないから海外留学をしたい」ということが言える。

表 7 因子分析の結果

回転後の因子行列 ^a						
	因子					
	1	2	3	4	5	6
情報保障4	.826	.169	-.110	.054	-.077	.006
情報保障8	.806	.169	-.193	.066	-.019	.141
情報保障3	.802	.195	-.128	-.034	-.048	.008
聴覚障害理解4	.749	.233	-.312	-.037	-.152	.050
聴覚障害理解3	.708	.298	-.208	-.151	-.284	.012
人間関係4/情報保障7	.700	.329	-.234	-.105	-.231	.035
情報保障1/聴覚障害理解1	.684	.221	-.241	-.230	-.225	-.034
情報保障6	.675	.283	-.151	-.212	-.306	.150
大学からの提供5	.663	.219	-.280	-.100	-.012	.112
情報保障5	.660	.227	-.166	-.189	-.022	.073
補聴機器関連2	.636	.163	-.330	-.098	-.036	.128
就職3	.567	.497	.035	-.206	-.219	.188
人間関係1	.564	.455	-.032	-.243	-.034	.038
人間関係2	.561	.524	-.112	-.236	-.121	.055
補聴機器関連1/聴覚障害理解2	.542	.232	-.208	-.279	-.213	-.019
就職1	.483	.296	-.088	-.157	-.033	.158
生活体験B1	.334	.724	-.084	.007	-.359	.087
生活体験B3	.405	.715	.034	-.163	.029	.038
生活体験B2	.376	.670	-.038	-.227	.024	.044
学問B5	.350	.654	.094	.056	-.338	.068
期間1	.172	.635	.044	.071	-.195	.264
語学力1/学問B1	.368	.528	.032	-.103	-.206	.159
質問 4 8	.256	.518	.041	-.105	-.007	.262
語学力2/学問B2	.150	.401	.073	.107	-.266	.394
大学からの提供1	-.289	-.381	.346	.096	.364	-.168
大学からの提供2	-.164	-.036	.856	.146	.154	.041
大学からの提供3	-.111	.050	.850	.174	.263	-.021
大学からの提供4	-.156	-.020	.778	.160	.279	.030
情報保障2	-.419	-.244	.484	.055	.369	.002
生活体験B4	-.217	.088	.474	.364	-.016	-.142
生活体験B5	-.162	.055	.473	.063	-.008	-.023
生活体験B6	-.151	.076	.470	.239	-.075	.023
人間関係5	-.214	-.082	.463	.165	.266	-.080
就職2	-.189	-.133	.405	.078	.054	-.073
語学力4	-.054	-.087	.233	.755	.104	.122
語学力6	-.185	-.025	.243	.674	.352	.080
語学力5	-.112	-.170	.380	.630	.064	.124
語学力7	-.305	.003	.184	.592	.323	-.035
人間関係3	-.144	-.050	.351	.431	.352	.112
生活体験A2/学問A4B7	-.250	-.339	.239	.227	.684	-.008
生活体験A1/学問A3B6	-.197	-.183	.349	.205	.681	-.099
語学力3	-.054	-.122	.105	.256	.582	-.021
学問A1	.051	.007	.011	.056	-.033	.875
学問A2	-.037	.120	-.018	-.032	.018	.724
学問B3	.304	.506	-.188	.185	-.140	.549
学問B4	.341	.424	-.144	.207	-.108	.508
期間2	.105	.228	.097	.233	.048	.474
生活体験B7	.130	.298	-.025	.251	.145	.339
因子寄与	9.012	5.538	4.783	3.208	3.030	2.795
累積寄与率	18.774	30.312	40.278	46.961	53.274	59.097
因子名	情報保障	意欲・期間	大学からの支援	語学力	留学生活に対する不安のなさ	学問（専門性の追求）

因子抽出法：主因子法
 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
 a. 22 回の反復で回転が収束しました。

5. 留学への不安要因に関する相関係数の結果及び考察

次に、海外留学に対して不安を抱き、留学への意欲の妨げの要因と考えられ、その相関が見られた質問項目は、不安の度合いが大きいもの(*3)から「留学費用に対して不安がある」「留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるか不安である」「留学先の語学学校／専門学校／大学生活が不安である」「大使館とのやり取りが不安である」「ライティングが不安である」「リーディングが不安である」であった。

表 8 海外留学に対して不安を抱く要因

カテゴリー名	質問項目	相関
大学からの提供	「留学費用に対して不安がある」	-.324
生活体験（教育機関） ／学問（専門性の追求）	「留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるか不安である」	-.268
生活体験（教育機関） ／学問（専門性の追求）	「留学先の語学学校／専門学校／大学生活が不安である」	-.195
大学からの提供	「大使館とのやり取り（パスポート紛失時等…）が不安である」	-.178
語学力	「ライティングが不安である」	-.162
語学力	「リーディングが不安である」	-.151

本調査で聴覚障害学生の海外留学に対する不安の相関は、質問項目の中であまり高いものは見られなかった。しかし、やや高い不安の要因として見られた質問項目は「留学費用に対して不安がある」であることが明らかになったが、相関を見ると、-.324であったため、不安要因はあまり大きくはないといえる。

6. 自由記入回答の結果及び考察

問 49 問～52 問の全 4 問は、聴覚障害学生が今日まで語学をどのように学習してきたか、また外国という概念への意識があるかを把握するために用意した。以下、質問項目である。

- ・問 49 「どのようにして外国語を勉強してきましたか？」
- ・問 50 「それはどの外国語ですか？」
- ・問 51 「いつ海外留学してみたいと考えましたか？」
- ・問 52 (1) 「今までに国際交流を経験したことがありますか？(例：日本国内での交流、海外旅行、海外研修等・・・)」、(2) 国名記入」

回答が 2 つ以上出た内容のみ名前を付けて表に提示した。回答が 1 つだったものはその他として集結させて提示した。

各グラフの結果を見ると、問 49 は、外国語学習方法は授業が 52%と大多数を占めている。問 50 は、英語が 61%、フランス語が 13%という結果が出た。問 51 は、考えたことはないが 8%であった。この回答は予想外であった。48 問の質問項目の中で高い相関が見られた質問があるにも関わらず、学習や体験の意欲と海外留学の意欲は直結しない学生もいるということが明らかになった。しかし、第 2 位は高校生の時、第 3 位は大学 2 年生の時であった。どちらも人生の分岐点となる時期であるため、新しいことへの興味や好奇心を持ち、自分の人生計画に模索することから、海外留学も意識すると考察する。問 52

(1) は、海外旅行が 21%、経験なしが 20%、日本国内での交流が 19%と微少な差を見せた。しかし、海外旅行経験者と国際交流の経験がない者が極端に分かれた結果となった。問 52 (2) は、アメリカが 21%であり、他国と大差をつけた。本調査の対象者は、聴覚障害者のための大学に在籍する聴覚障害学生からの回答が大半を占めており、協定校(聴覚障害者のための大学)のアメリカの聴覚障害学生との交流経験を持つ学生が多数いたことから、この結果が得られたと考える。

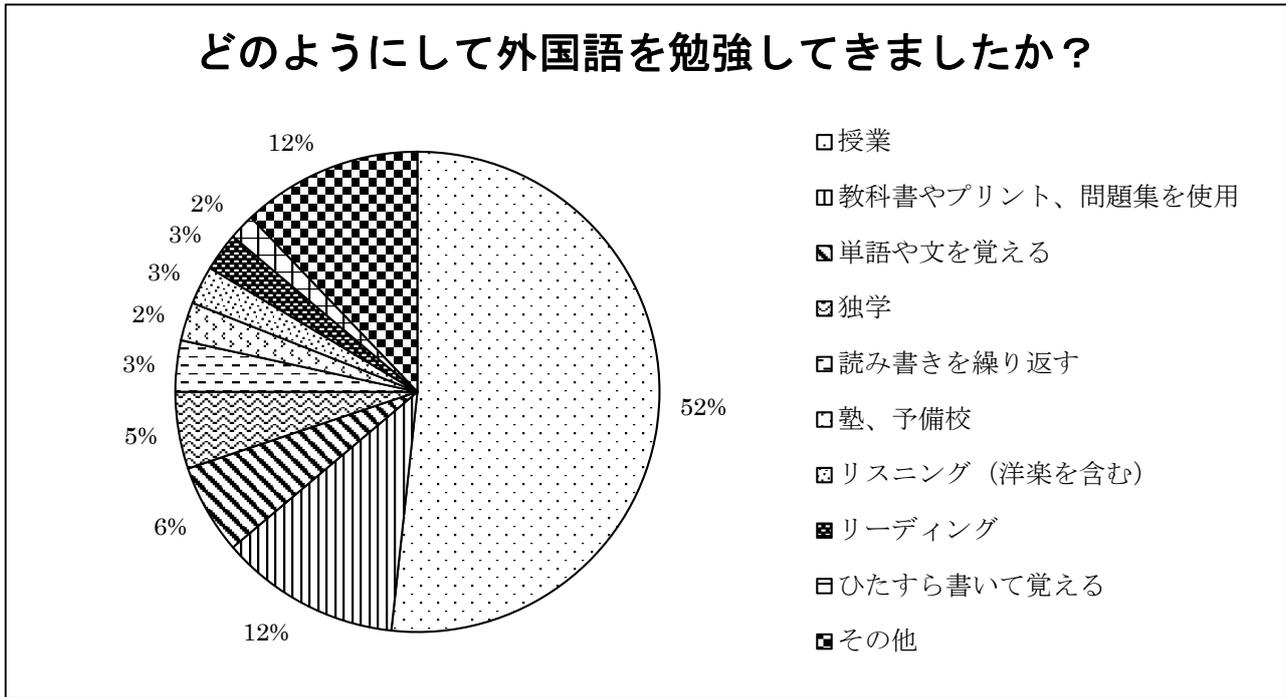


図 2-1 問 49 「どのようにして外国語を勉強してきましたか？」

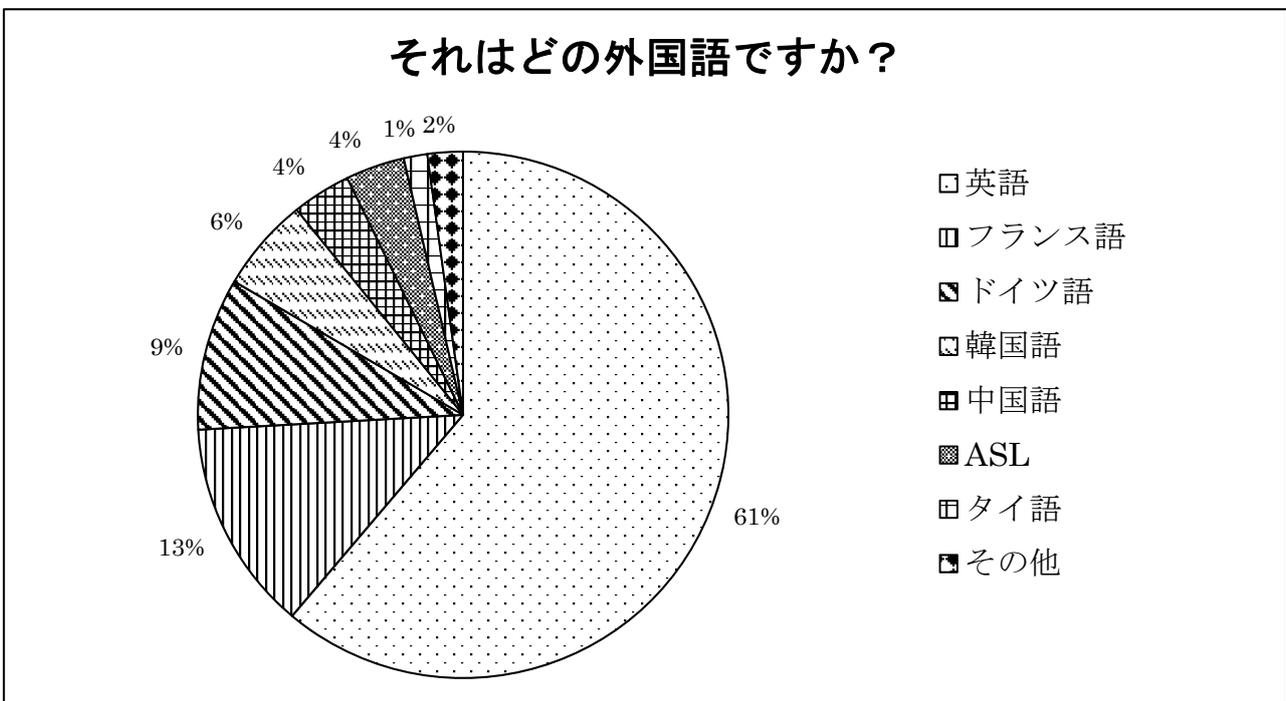


図 2-2 問 50 「それはどの外国語ですか？」

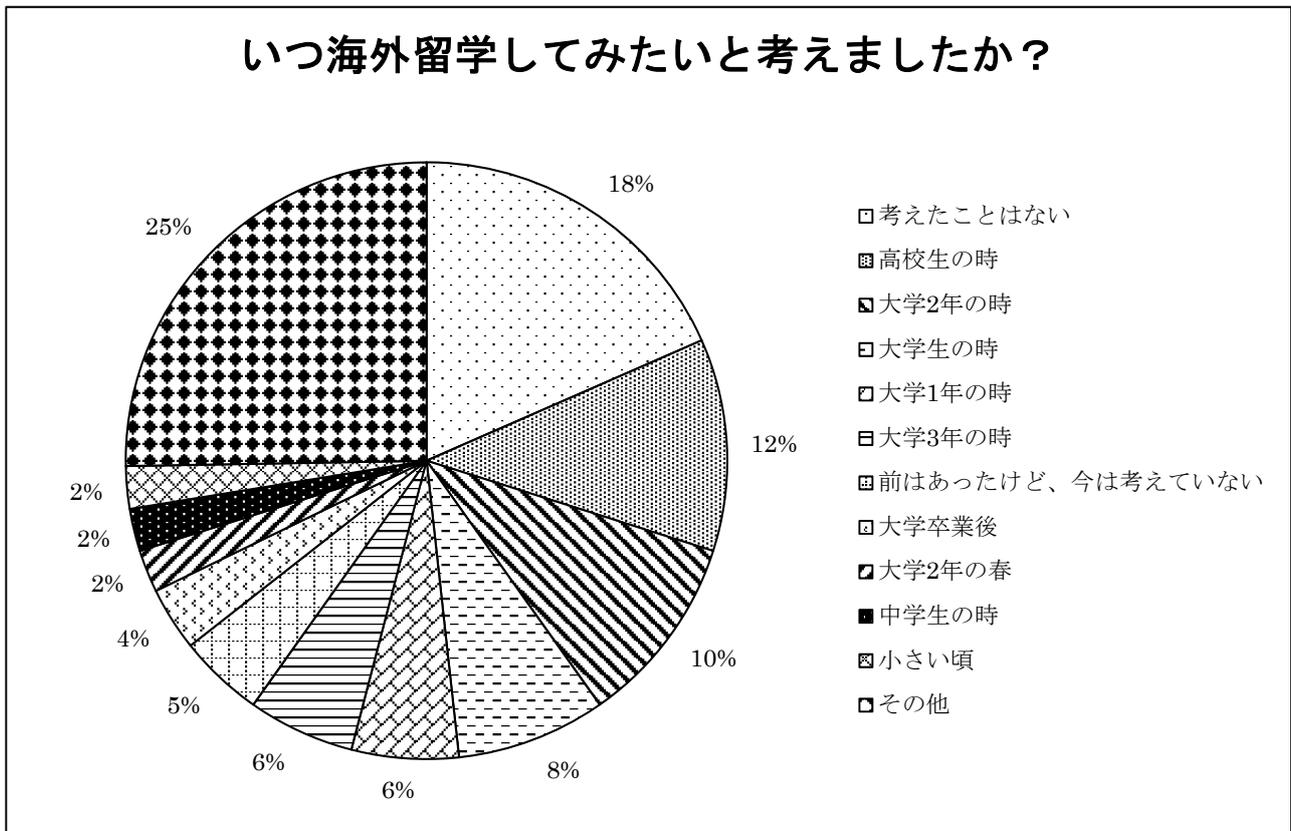


図 2-3 問 51 「いつ海外留学してみたいと考えましたか？」

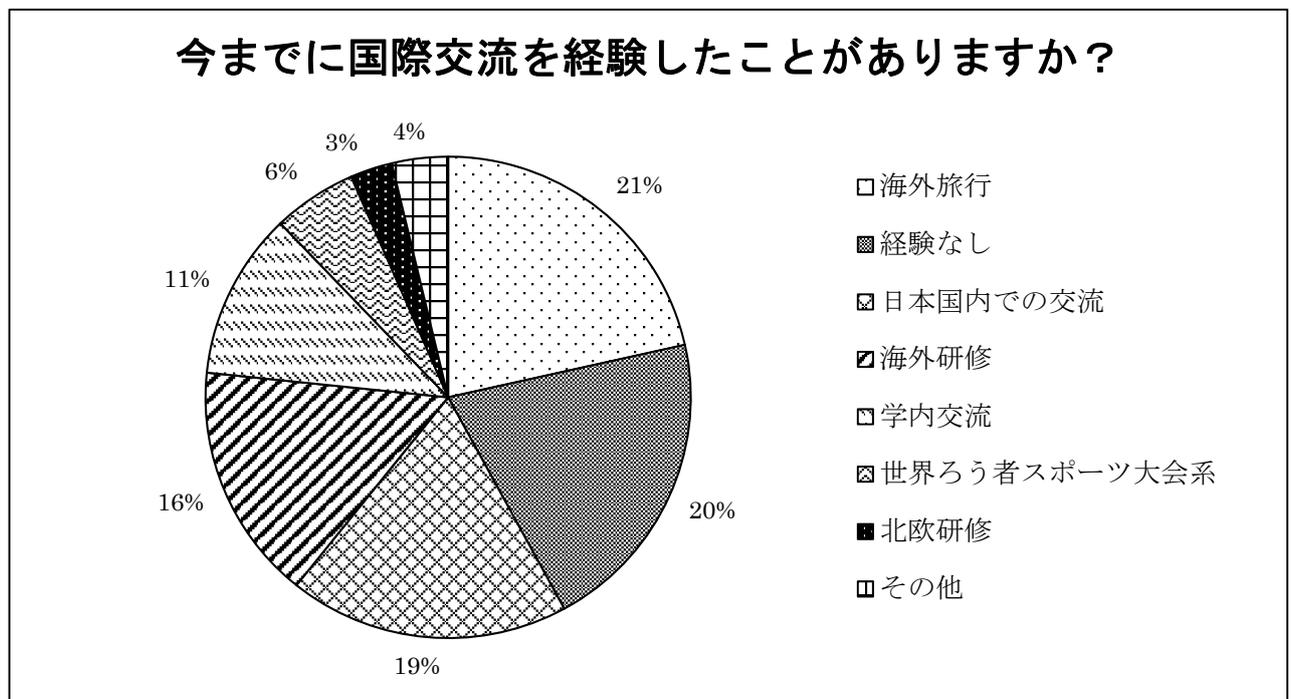


図 2-4 問 52 (1) 「今までに国際交流を経験したことがありますか？」

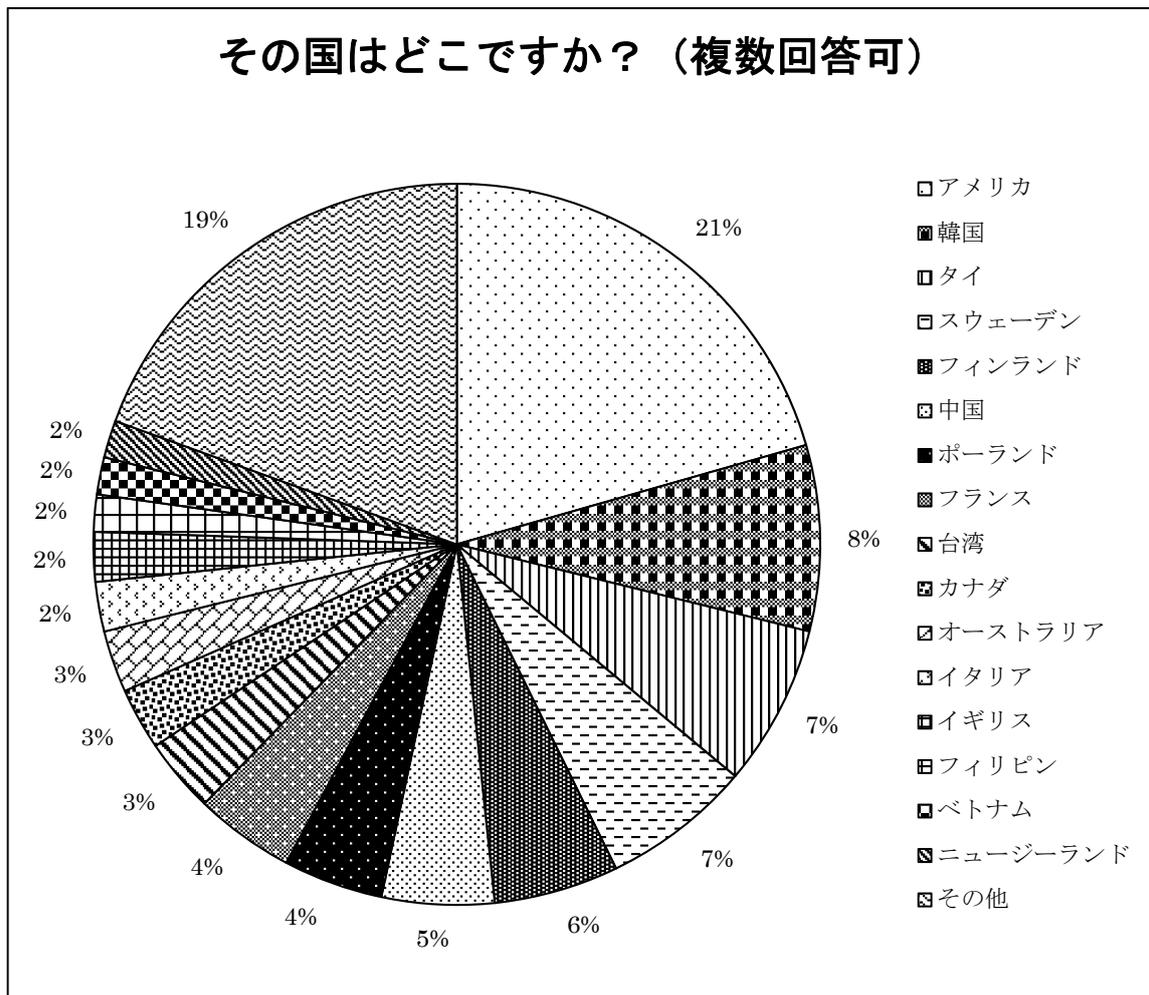


図 2-4 問 52 (2) 「国名」

第2節 海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査

1.目的

過去に半年以上の海外留学を経験した聴覚障害者に直接、海外留学準備から海外留学中、帰国後までに経験したことを面接し、得た回答から海外留学するにあたって必要な制度、整備が求められることが何かを明らかにする。

2.方法

海外留学の経験を持つ聴覚障害者へ依頼を行い、年齢、性別、職歴、留学先問わず、5名に、面接調査法の一つの手法である半構造化面接法で質問する形で行う。依頼者の選定理由は、海外留学を経験したことである。これは、将来、聴覚障害学生の海外留学手段の選択肢を増加させるため、多種多様な情報を収集することも目的の一つとしている。

面接調査の対象者は、男性1名、女性4名の計5名の聴覚障害者である。所属別は、社会人2名、大学生2名、大学院生1名である。留学先別は、フランス1名、カナダ1名、アメリカ合衆国3名である。留学期間は、5名とも様々である。

表9 面接調査対象者

	性別	所属	留学先	留学期間
A	女性	社会人	フランス	4年間
B	男性	大学生	アメリカ合衆国	5ヶ月間
C	女性	大学生	カナダ	11ヶ月
D	女性	大学院生	アメリカ合衆国	4年間（滞在期間は約6年～7年間）
E	女性	社会人	アメリカ合衆国	3年間

まず、質問紙調査で得た結果を基に作成した 10 項目のカテゴリー「(1)人間関係（交流）、(2)語学力、(3)就職、(4)情報保障、(5)A 生活体験（教育機関）、(5)B 生活体験（日常生活）、(6)A 学問（専門性の追求）、(6)B 学問（体験・学習）、(7)期間、(8)大学からの提供、(9)補聴機器関連、(10)聴覚障害理解」からそれぞれ海外留学経験を有する聴覚障害者への質問内容を作成する。(表 10 参照)

また、面接調査時に円滑に進行させるために、フェイスシートを作成し、準備する。(表 11 参照) 面接時には、面接調査質問項目とフェイスシートで回答を得た情報から、半構造化面接法による面接調査を行う。

本調査で得た回答は、質的研究の修正ストラウス・グレイザー版 GTA（以下、M-GTA）(*1)を用いた分析を行う。分析方法は、5 名から得た回答から分析ワークシートを作成する。分析ワークシート(*2)には、各カテゴリーの概念名、定義、ヴァリエーション、倫理的メモを記入していく。詳細は以下の通りである。

- ・概念名：ヴァリエーションの記述を束ねる上位の概念
- ・定義：どのようにデータを解釈したか
- ・ヴァリエーション：記述の抽出
- ・倫理的メモ：プロセスで「気づいたこと」、「考えたこと」、「採用しなかった解釈」などを記入

分析ワークシートには、11 項目に分類できたヴァリエーションを記入していき、5 名の回答に共通する内容をカテゴリー生成し、それぞれに概念名と定義を付ける。留学中の成功体験及び苦労体験等を回答内容から把握し、その回答内容からどのような支援が必要かを分析し明らかにしていき、聴覚障害学生の海外留学支援において何が必要かを検討する。

表 10 面接調査質問項目（質問順に並べ替えたもの）

質問の切り口	何を目的に留学をしたのか。
(6)B学問（体験・学習）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学先でどのような学問を学んだのか。 ・ 留学先で得た知識や学問が帰国後の日本でのキャリアアップに影響したか。（→③就職の質問へ） ・ 留学前と後で周囲からの対応に何か変化はあったか。 ・ 自身のスキルにどのような影響をもたらしたか。
(5)A生活体験（教育機関）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学先での講義受講はどのようなものだったか。
(4) 情報保障	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学先の教育機関内ではどのような情報保障があったか。 また、情報保障支援を受けたことはあるか。
(6)A学問（専門性の追求）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外留学先で学ぶにあたり、何か資格や学位授与を目指したか。
(2) 語学力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手話、留学先の言語はどのように学んだか。
(3) 就職	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学経験は、就職活動に活かしたか。 ・ どのような影響をもたらしたか。
(8) 大学からの提供	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大使館や入国審査では何か苦勞したことはあったか。 ・ きこえに関する配慮や支援を学外で受けたか。
(10) 聴覚障害理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学先の聴覚障害に対する意識を感じたか。 ・ 聴覚障害に対する考え・見方はどうだったか。 ・ 日本と留学先の障害に対する理念、配慮の違いは何だと感じるか。（例：文化、国民性、国の方針など）

(1) 人間関係	<ul style="list-style-type: none">・ 留学先での教員との関係作り、友人作りはどうだったか。・ ろう・難聴者と健聴者ではどちらの交流が多かったか。・ コミュニケーションが取れるか不安に思ったか。
(5) B生活体験（日常生活）	<ul style="list-style-type: none">・ 勉強以外で苦労したか何か。・ 勉強以外で期待したことは何か。
(7) 期間	<ul style="list-style-type: none">・ 留学することで就職活動開始に対する不安や心配はあったか。
(9) 補聴器機関連	<ul style="list-style-type: none">・ 留学先で補聴器や人工内耳を利用したか。 <p><yesなら>補聴器や人工内耳の調整、アフターケアを現地で行ったか。</p> <p>調整頻度、どのようなサービスが欲しかったか。</p>

表 11 フェイスシート

1. 面接調査を行う前に、簡単なプロフィール記入に御協力をお願い致します。

- ・氏名： _____
- ・所属先： _____
- ・連絡先 (email) : _____
- ・海外留学先 (国名) : _____ (教育機関) _____
- ・留学期間 : _____ 年 _____ ヶ月

2. 以下の質問について、当てはまる方に○を付けてください。

問 1 : 学士、修士、博士号を留学先で獲得することを目標にしていた。 — Yes or No

問 2 : 留学先の講義内で情報保障を受けた。 — Yes or No

問 3 : 講義内容についていくのが大変だった。 — Yes or No

問 4 : 英語をもっと勉強すれば良かったと思った。 — Yes or No

問 5 : 留学期間と語学力の伸びには関係があると思う。 — Yes or No

問 6 : ホームシックにかかった。 — Yes or No

問 7 : 異文化体験をした。 — Yes or No

問 8 : 留学先で積極的に行動した。 — Yes or No

問 9 : 海外留学のキャリアを就職活動に活かしたいと思った。 — Yes or No

問 10 : 留学先で補聴器・人工内耳の重要性を感じた。 — Yes or No

問 11 : 留学先の国・地域は、聴覚障害の理解があると感じた。 — Yes or No

3. 結果及び考察

5名のフェイスシート回答は付録に示した。(付録：表 12-1～12-5 参照)

回答方法は、Yes or No の二者択一であったが、質問内容によってはどちらとも当てはまるという回答があったため、Neither の選択を設置した。

フェイスシートの問 2 の結果は、問 1「学士、修士、博士号を留学先で獲得することを目標にしていた」に Yes が 1 名、No が 4 名だった。問 2「留学先の講義内で情報保障を受けた」に Yes が 4 名、No が 1 名だった。問 3「講義内容についていくのが大変だった」に Yes が 3 名、No が 2 名だった。問 4「英語をもっと勉強すれば良かったと思った」に Yes が 2 名、No が 3 名だった。問 5「留学期間と語学力の伸びには関係があると思う」に Yes が 4 名、No が 1 名だった。問 6「ホームシックにかかった」に Yes が 3 名、No が 2 名だった。問 7「異文化体験をした」に Yes が 4 名、Neither が 1 名だった。問 8「留学先で積極的に行動した」に Yes が 4 名、Neither が 1 名だった。問 9「海外留学のキャリアを就職活動に活かしたいと思った」に Yes が 4 名、Neither が 1 名だった。問 10「留学先で補聴器・人工内耳の重要性を感じた」に Yes が 1 名、No が 3 名、Neither が 1 名だった。問 11「留学先の国・地域は、聴覚障害の理解があると感じた」に Yes が 4 名、Neither が 1 名だった。

本調査では、得られた回答に M-GTA 質的研究を行うにあたっての条件であるカテゴリ 11 個を抽出するための分類作業を行い、それぞれに概念名と定義を付けた。(表 12 参照)また、分析シートワークシートの結果は表 13-1～13-11 の通りである。

これらのフェイスシート回答結果と面接調査の結果から聴覚障害者・学生の海外留学における現状を次のように把握することができた。

面接調査の対象者である聴覚障害者の回答から、各々が海外留学を意識した経緯や海外留学の決断に至る背景は様々であったが、共通して見られたことは自身が海外で何を学びたいかが明確にされていたことであった。海外留学先で学びたい学問が決まると、それに合った条件を持つ海外留学派遣団体への応募や個人で学校を探して留学準備を進めている。その際、きこえに関する配慮が必要となる場面(例：大使館での申請時)では、筆談での対応や特別許可で手話通訳者の同伴といった事例があるため、大使館やビザ(査証)申請時の対応マニュアルを用意しておくことで、時間のかかる書類準備等も効率的に取りかかれると考えられた。

次に、海外留学中であるが、5名それぞれが海外でしか経験できないこと（苦労体験と成功体験）を経験したことが明らかとなった。海外生活を経ていく中で、異文化体験を得ることによって日本の文化や自分のきこえに対する再認識など、幅広く気づきと向き合えるといった海外留学の効果的な一面が見られた。また、講義を受講していく中で、留学開始時に利用していた情報保障から自分の現時点でのニーズに合った情報保障を再検討する機会を経験し、常に100%の情報を獲得できるように自分自身を自省しながら（アイデンティティの確立）生活するといった点においては、海外の中でも情報保障支援に先進している教育機関では学習能力並びに学習意欲の向上も大いに期待できることが示唆される。さらに、生活環境内に聴覚障害に対する理解がある地域で生活した聴覚障害者からの回答から、障害の有無関係なくコミュニケーションが取れる喜びや生活上の安心感が得られたことが窺えた。健聴者とのコミュニケーション手段において自分の有する能力をどう活用していくか考える良い機会になり、健聴者との交流から得る気づきが自身の成長に結びつけられると考えられた。

最後に、帰国後であるが、海外留学経験が5名それぞれに効果的な変化をもたらせ、それらが日本での就職活動や各々の自信に繋がっていることが明らかになった。しかし、就職面においては時代の変遷も関与していることから異なる回答が得られた。現在、大学生であるBさんとCさんからは「留学経験したことが、実際にアピールポイントになると思う」「（就職）説明会に行ったときに留学したことに興味を持ってくれる会社が多かった」と海外留学を就職活動に活かしている。一方、DさんとEさんからは「日本では、アメリカで学んだこと、取得資格を生かせる仕事環境が社会の中にない」「就職活動では、アメリカ留学をアピールしすぎないようにと先輩のろう者から言われた」と海外留学の経験が活かせる職場環境がなかったといえる。また、AさんとEさんは現在、海外留学経験を活かせる職場で働いている。これらのことから、現在の聴覚障害者の就職状況並びに海外留学後の進路についての調査を行い、現状を把握することが課題として挙げられると考えられた。

表 13 11 項目のカテゴリの概念名と定義

	概念名	定義
①	海外留学のきっかけ	海外留学を意識した背景
②	海外留学準備	海外留学に向けた事務的作業
③	留学先での講義受講方法	受講時の心境
④	情報保障	聴覚障害者への配慮の度合い
⑤	情報保障 2	学内外での困り感
⑦	就職	就職への影響
⑧	海外留学経験による変化	自身の変化に対する気づき
⑨	海外生活体験	生活内での困難さ
⑩	聴覚障害者理解	日本との相違
⑪	補聴器装用	補聴器の重要度
⑫	留学希望者へのアドバイス	経験と自信の関連性

表 14-1 分析ワークシート①

概念名	海外留学のきっかけ
定義	海外留学を意識した背景
ヴァリエーション	<p>Aさん： フランスに6ヶ月間滞在経験があり、その時に手話を習得した。日本でフランス語の必要性を感じたが、<u>日本ではフランス語教師のレベルがまちまちでスムーズに習得できなかったため、留学した方が早いと思い、フランス留学を決断した。</u></p> <p>Bさん： <u>ろう文化について学びたかったから行った。</u>今まで自分の周りほろう・難聴者だけという環境で育ってきた。インターンシップで初めて健聴者の社会を知り、「自分は他の人とは違うんだ、障害者なんだ」と気づいた。そこから、ろう文化について意識するようになり、それがきっかけで留学を希望した。 アメリカ留学を選択した理由は、ろう文化が強いから。</p> <p>Cさん： 高校生の時に英語の授業の中でASLを学ぶ機会があった。そこで、<u>英語が好きになった。得意とまでは行かなかったけど、いつか留学してみたいと思うようになっていた。</u>本当は、大学卒業後を考えていたが、親から「新卒で就職しないと難しい。学生の間なら応援する」と言ってもらい、大学4年次に休学をして留学した。</p> <p>Dさん： 父親がヨーロッパ出張で家に不在だったことがあり、3歳～5歳頃から母親より海外の状況（文化、人種、考え方）を聞いて、興味を持つようになった。また、父親の実家が長崎だったこともあり、生活の中に海外は身近に存在していた。<u>幼い頃から、他の国がどのようなものなのか興味があった。</u> <u>成長していく中で、きこえに対する壁を感じてはいたが、幼少期に抱いた気持ちが留学することの一番の根源になっていた。</u> 中・高等部時、保護者向けでギャローデット大学留学経験者の講演があった。当時は、耳の聞こえない人が海外留学なんてとても想像できないという時代だったので、とても印象深かったです。</p>

	<p>社会人になると、海外の人との交流に恵まれた。最終的には短期大学時代のろう者の先生にカリフォルニア州立大学ノースリッジ校（以下、CSUN）の入学を進められた。</p> <p>E さん：</p> <p>高校までろう学校に通っていたため、筑波大で初めて健聴学生と一緒に学ぶ環境になったが、相手（先生や学生）が何を話しているのかわからなかった。講義について行くのもやっとだった。当時は支援環境が整備されていなかった。1年次に支援室ができたばかりという状態だった。2・3・4年で手話通訳、NT、PC テイクも少しずつ受けられるようになった。いつも友人にノートを借りたりして、なんとか頑張って勉強していた。4年間で自分の満足のいく学習をして卒業できるかの不安や心配もあった。高校今までは、みんなと楽しく勉強してきたが（コミュニケーションにも困らなかった）、大学時代は自分が納得いくような学習ができていなかった。大学3年の時にろうの先輩が日本財団でアメリカ留学することを知った。元々、ギャロは小5の時に見た一般のニュース特集（報道ステーションみたいなやつ）で知っていたが、当時は海外からろう者が集まって勉強できる場所ということだけを認識していた。先輩の留学決定で、そのニュースのことを思い出した。先輩の存在もあって、4年次に財団に応募した。専門は美術。<u>ろう・健聴関係なく、美術が楽しめる場（WS、ろう学校、美術館など）を作りたいと思った。アメリカは情報保障も進んでいると聞いたし、100%情報が得られる環境で学べるのではと思い、留学に興味を持つようになった。</u></p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味関心があることについて学ぶことを目的としている。 ・幼少期の海外体験、育った環境が海外留学に対する意識に繋がっている。

表 14-2 分析ワークシート②

概念名	海外留学準備
定義	海外留学に向けた事務的作業
ヴァリエーション	<p>A さん： 回答なし</p> <p>B さん： 長期間滞在するときは VISA が必要になる。VISA を取得するためにアメリカ大使館を訪れた。英語の筆談でやり取りをした。アメリカで日本大使館を訪れるようなことはなかった。</p> <p>C さん： 回答なし</p> <p>D さん： ・実際に先生と CSUN へ見学に行き、その際に入学手続き（準備に必要な書類の確認や面談も含む）も行った。<u>TOEFL やきこえに関するオーディオロジーの証明書（英語版）の準備の関係上、入学は翌年になると言われ、準備に半年かかった。相手国とのやり取り（メール、ビデオチャット、FAX）で半年以上、あわせて1年かかった。</u> ・CSUN から合格通知を受け取ったときの文書に留学するために必要なものが書かれていた。 入学が決まると、CSUN の国際留学生事務局と NCOD の両方の連絡やりとりが始まった。両方からの指示に従いながら、自分で調整できるものは自分でやった。しかし、電話での問い合わせ（国内の病院とか留学保険とか）は親にお願いしていた。 ・また、留学に関する引っ越しとかの手続きや航空チケットは、旅行会社の知人と相談してた。 ・アメリカ大使館への訪問についての時間調整は自分で行う。手話通訳者は、私の友達（手話のできる健聴者）にお願いして特別に同伴することを前もってアメリカ大使館に伝えていた。（普通は、一人でしか入らせてもらえない。）</p>

	<p>E さん :</p> <p>財団や ASL 協会から手続き方法を教えてもらって、申請や海外郵送は全て自分でやるように言われてやったが、<u>アメリカ、特にギャロウデット大学は対応が遅いから、ビザ（査証）の申請に間に合うか心配はあった。</u>ASL 協会の担当の男性（ろう）がアメリカ留学経験者であったことから相談もしやすかった。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none">・ 留学先の大学の準備は時間がかかり、且つ作業が多いため、早めの準備が必要。

表 14-3 分析ワークシート③

概念名	留学先での講義受講方法
定義	受講時の心境
ヴァリエーション	<p>A さん： フランス語とフランス手話。パリろう学校には、成人ろう者のためのフランス語クラスがあった。<u>教員はみな、ろう者だったため、特に問題がなかった。</u>手話を使って、フランス語の授業を行った。英語に関する関わりはなかった。</p> <p>B さん： ESL（英語集中講義プログラム）、AsAMST SGISD（海外留学生や障害者が差別についての活動をするグループ）で<u>積極的に参加して活動をした。</u>ESLは月・金の8時～昼まで。午後は活動。他の曜日はインターンシップ。インターンシップ先は、DEAFinc（HP：deafinonline.org）。</p> <p>C さん： ・科目は英語。 ・クラスメイトは皆、健聴者だった。先生はカナダ人、学生は外国人留学生だった。また、小さな学校であった。学校で学ぶ学生は、移民してきた人が現地生活するために英語を学ぶ、または夏休みを利用して研修をしに来たというケースが多かった。 ・レベルに合ったクラス分けがあった。<u>0から英語を勉強する人もいたから、前もってきちんと勉強しておけば良かったと思うことはなかった。</u>しかし、学外は皆話すのが速かったため、きき取るのが大変だった。学校ではわかりやすく教えてくれるから、そのような苦労はあまりなかった。</p> <p>D さん： CSUNは健聴学生が多く在籍する一般大学であるから、講義は健聴学生と一緒に受けることになる。CSUNの中に当時500人程のろう・難聴学生がいた。<u>講義開始前には、支援学生の確保について担当教員と相談したり、クラス内に支援学生募集の周知をしてくれたりと協力してもらった。</u>また、担当教員が毎回講義に来る学生を教</p>

	<p><u>えてくれたので、その学生に支援の依頼をしたこともあった。教員の中には（支援をした学生に）ポイントをあげる人もいた。</u></p> <p>E さん：</p> <p>1年目は、海外留学生用プログラム。2年目からは大学院。 <u>留学1年目は、海外留学生のためのプログラムに入った。</u>学部生のクラスの受講も可能で、日本にはない科目を取ろうと思い、「ろう者学入門」、「デフアート入門」などを取った。プログラムは2つ、1つはレベルがまだまだな人用（ELI）は基本必須。もうひとつが International Internship Program(IIP)（現在、International Visitor Program）でこれに入っていた。ELI、IIPの振り分けは、大学の審査で決められる。IVSプログラムは何でも取れるけど、<u>不安だったから英語クラスだけは受講した。ASLはうる覚えからの始まり</u>だったが、生活の中で身につくから取らなくても大丈夫と言われたような……。ASLは留学事前研修で簡単な表現を学んではいた。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ C さん：健聴者が通う語学学校で英語の勉強をした。 ・ D さん：大学講義受講時、情報保障を受けた。→クラスメイトや教員の理解があるかは聴覚障害学生にとって大事な点。 ・ E さん：専門的な講義を受講するためにも英語、ASLの習得は大切。 ・ 海外留学の目的に合わせた学問を受講できている。

表 14-4 分析ワークシート④

概念名	情報保障
定義	聴覚障害者への配慮の度合い
ヴァリエーション	<p>A さん： 情報保障を受けていない。</p> <p>B さん： <u>PC テイク、筆談。</u>手話通訳は ASL がまだわからなかったからつけなかった。 ろう学生に対しては、ASL でコミュニケーションを取り、健聴者に対しては筆談（スマホで打って見せる方法）がメインだった。 マサチューセッツ州立大学は健聴学生の方が多い。他国のろう者留学生はいなかった。 <u>情報保障に対する不満はなかった。</u>情報の漏れは実際にあったかは分からないけど、提示された内容で十分理解できたし、テストも問題なく受けることができた。</p> <p>C さん： ・<u>CD のきき取りを口話に変えてもらった。</u> 先生からは、「英語が分からないからでしょ？」と誤解されたが、きき取れないことを説明して分かってもらった。自分の中でも英語が分からないからなのかあいまいになったことがあった。耳のことで大きなトラブルになることは特になかった。 <u>情報保障は無し。</u> 文字に頼ると耳の鍛えにならないと思った。自分としては、音と口話で相手が何を言っているのか分かるようになりたかったから、特に文字による保障は頼まなかった。 <u>長文の CD リスニングの時は読むのが大変だからという先生の理由で、自分だけリーディングに置き換えた方法で行った。</u></p>

	<p>D さん :</p> <p>National Center On Deafness (以下、NCOD) : CSUN 中にある聴覚障害学生のための情報保障センターで、<u>名前・学籍番号・希望の情報保障 (手話通訳 or キャプション) 、利用時間帯、日程、講義名、理由</u>を書いて提出すると、<u>情報保障が受けられる</u>。手話通訳の場合は、自分の希望する通訳者の選択も可能であった。入ったばかりの時は、ASL がまだ習得できていなかったから、キャプション (あとで全文面がメールで送られてくるため、復習もできる) を利用した。最初は、キャプションと NT で講義を受講した。NT はカーボン付きで支援学生 (NCOD バイト登録者) が書いた内容をもたらう方法だった。その NT の内容とキャプションの内容を照らし合わせて復習していた。半年後には、ASL 通訳による情報保障に変更した。その時の情報保障は ASL と NT を選択した。NCOD で申請できる情報保障は 1 つと決まっていた。私は入学当時はまだまだ ASL と英語という環境に慣れていないということから、特別な配慮で 2 つ申請の許可をもらえてました。しかし、だんだん慣れてくるとアメリカろう学生同様に扱われるようになっていました。</p> <p><u>学内における情報保障は、モニターによる文字保障など大学全体にろう学生がいることが認識できるような環境整備がされていた。</u></p> <p>(例 : TV の字幕、カフェなどのモニター)</p> <p>E さん :</p> <p><u>非常勤講師の英語クラスのみ、手話通訳が 2 人</u>ついていた。英語クラス (幅広く分けられている) は、初級・中級に値するクラスを 2 つ受講。単位を取ったら徐々に上級クラスを取るような感じだった。</p>
倫理的メモ	<p>大学の組織形態によって、情報保障の在り方は様々である。自分にとって、どのようなニーズが合うのかを知るきっかけにもなる。ここでも、教員の理解は大きなポイントになる。</p>

表 14-5 分析ワークシート⑤

概念名	情報保障 2
定義	学内外での困り感
ヴァリエーション	<p>A さん： 回答なし</p> <p>B さん： 回答なし</p> <p>C さん： <u>自分だけがきこえなくて分からない</u>という状況があり、その時は隣の席の人に説明してもらっていた。</p> <p>D さん： <u>講義終了後や講義外にクラスメイトや先生と会っても共通のコミュニケーション手段がなくて、取れなかった。</u>（ASL わからない健聴学生・先生、きこえない自分） 欲しかった情報保障は、健聴者とコミュニケーションが取れるモバイル機器（例：UD トーク）。</p> <p>E さん： ・学内：大学院のアメリカろうの歴史の講義。<u>先生はろう者だったが、健聴学校育ち且つ対応手話の使用者だった。ASL を習得していた自分にとっては、分かりにくかった。</u>（その先生の手話が独特だったのか、たまたまわかりにくかった）クラスの中に視野狭窄の学生（盲ろう学生）がいた。その学生に対して、専任のろう手話通訳士（先生の対応手話を見ながら、ASL で通訳していた）がついていた。ASL 通訳だったので、一緒にクラスを受講していた香港の学生と横目で見ながら授業内容を理解していた。そういう方法もありだな～と思った。 ・学外：特になし。</p>

倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none">・健聴者（学生）の中に自分一人聴覚障害学生という環境の中で聞こえに対して、改めて痛感することも経験するかもしれない。→自分のできないことをどう補っていくのか、その学生の課題になる。・講義外でのコミュニケーション手段→相手との交流時に、どのような方法があるか自ら探求する力が身に付くと、自分の障害への気づきになる。
-------	---

表 14-6 分析ワークシート⑥

概念名	就職
定義	就職への影響
ヴァリエーション	<p>A さん： アメリカ留学が多い中、フランス留学経験者はほとんどいなかったから<u>フランスの情報を提供できた</u>ことが良かった。講演会なども行い、フランス手話を広めたり、通訳を頼まれた。 また、<u>留学前の職業経験を活かして</u>、希望者（聴覚障害者）を募り、個人でフランスツアーの案内を行った。（予約などの手続きも全て一人で行った。） 経歴：留学前、旅行会社で勤務。留学後は ASL 協会。</p> <p>B さん： <u>留学経験したことが、実際にアピールポイントになる</u>と思う。面接の時に留学の動機は聞かれた。 留学先で得たものが自分の成長、キャリアアップに繋がっているかはまだわからない。</p> <p>C さん： 留学前はあわよくばと思っていたけど、1年間終わって仕事に繋がるまでの英語力ではないと感じて、英語に関係のない職場も探した。でも実際、<u>説明会行ったときに留学したことに興味を持ってくれる会社が多かった</u>。就活時期も周りより遅れるなどの不安や心配も特に心配はなく、なんとかなると思っていた。</p> <p>D さん： 自身の考えであるが、帰国後にすぐ就職することは少し違う。健聴者の仕事の数は多いが、ろう者はない。まずは、<u>自分が何をすべきか考えた</u>。ろうが働ける道が狭い、少ないことが課題として考えられ、それは自身にも当てはまることである。<u>日本では、アメリカで学んだこと、取得資格を生かせる仕事環境が社会の中にないが、自身の成長にはプラスになっている。</u></p>

	<p>E さん：</p> <p>帰国後は、筑波大学の大学院に復学した。（元々、同時進行で進めて、両方とも合格していた）</p> <p>就職先は、筑波技術大学。一般企業が受かっていたが、<u>アメリカで勉強もしたし、それを活かせるところで働きたかったため本学を選択した。</u>帰国後に O 先生に報告メールをしたことがきっかけで、アルバイトからスタートしたが、本学で働くようになった。</p> <p><u>就職活動では、アメリカ留学をアピールしすぎないようにと先輩らから言われたことを覚えている。</u>英語を使う会社なら英語と仕事を結びつけてできたかもしれないが、<u>障害者枠だとその機会もなかなかない。</u>また、<u>アメリカでろう者学を学んだと言っても一般企業の職種には結びつかない。</u>ろう関係の仕事（例：支援コーディネーター、福祉、障害関連）に就いて貢献したいと思っても、<u>募集があまりない、待遇等の問題もあり、あきらめるろう者も多い。</u>特に<u>アメリカで学んだことを活かせる受け皿が少ない</u>と感じている。私費留学したろうの先輩は、資格を取って帰国したのに待遇などの問題で一般企業を選択し働いている人もいる。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外留学経験がその後に活かされている人、活かせなかった人がいる。活かせなかった人の背景→海外留学で体得した能力が日本の職場、特に聴覚障害者枠で需要が少ないことに問題がある。 ・ B さん：就職活動でアピールできる。 ・ C さん：興味を持ってくれた企業が多かった。 ・ D さん：海外留学が必ずしも就職に結びつくとは限らない。 ・ E さん：就職活動でアピールしすぎないことと助言をもらう。

表 14-7 分析ワークシート⑦

概念名	海外留学経験による変化
定義	自身の変化に対する気づき
ヴァリエーション	<p>A さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・帰国後に<u>日本のマナー（時間について）を忘れて怒られたことがある。</u>遅れてもフランスは連絡無しで大丈夫だが、日本はそうではないということを再認識した。 ・良い点は、<u>自分の意見がはっきり言えるようになった。</u> ・<u>早く手話・言語を習得するためにろう者イベントに参加したり、ルームシェアも積極的に行った。</u>フランスでワークショップを行い、日本文化（折り紙や習字）をフランスのろう児に伝えた。 ・フランス人の友人から「あなたはフランス人」と言われ嬉しかった。ろう・健聴との交流はやはりろう者の方が多かった。 ・本当はフランス南部での生活がしたかったが、ろう者が少ない、ろう者のイベントが少ない状況では、本来の留学の目的からずれてしまうため、仕方なくパリに決めた。 ・パリは、冷たい感じがあるが、南部はオープンでおおらかな人が多い。 <p>B さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（マイナス面では）<u>やらかしたことや失敗も含めていろいろな経験をした。</u>最初のホームステイ先で生活3日目にしてトイレを壊した。弁償はしなかったけど、追い出されると思った。夜、友人と遊んだ帰りに裸のホームレスと遭遇し、ずっと追いかけられた、etc …。 ・（プラス面では）<u>ボランティアに参加した。</u>自閉症の学生がいる学校でボストン東スクール（生徒はアメリカ人、先生は日本人が多い）の運動会やイベントに参加した。また、学校の先生と仲良くなり、釣りにも行った。ボストンには、日本人が集まるグループがあり、そのキャンプに参加した。そのグループの中にはハーバードに行っている日本人学生もいて、<u>いろいろな話を聞くことができ、自分のモチベーションが高まった。</u>アメリカ滞在中日本人とコミュニケーションをとるときは口話だけではなく筆談も使っていた。 ・<u>ボストン大学 ASL サークルにもよく通った。</u>ろう学生との交流時

	<p><u>はASLでコミュニケーションした。健聴者でもASLできる人とはASLで。アメリカ生活の中で、40%健聴者、60%ろうと交流していたと思う。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本での生活とあまり変わらないけど、英語は筆談で行っていたから補聴器を外すことが多かった。補聴器の重要性はそこまで感じなかった。 ・特になし。帰国後すぐはアメリカの感覚が残っていた。また、漢字にも慣れなかった。だけど、1か月後には日本の感覚に戻った。 <p>Cさん： 回答なし</p> <p>Dさん： <u>TPOに合った言語表現（ASL、英語）を現地で体験して、知ることができた。</u></p> <p>Eさん： 回答なし</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化の再認識 ・異文化の経験から自身の自信やモチベーション向上に結びつく

表 14-8 分析ワークシート⑧

概念名	海外生活体験
定義	生活内での困難さ
ヴァリエーション	<p>A さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルームシェア。多国籍また、健聴・ろう者との共同生活を3回経験した。 1回目：ろう者3人、健聴者2人。 2回目：ろう者2人。 3回目：ろう者3人、健聴者1人。（本人を含んだ人数） <p>ルームシェアした相手の国はフランス人、ベトナム、マリ。</p> <p><u>共同生活だからきれいに使おうと話し、日本の文化を説明しても理解してくれなかったから落ち込んだ。例：掃除。きれいに使うマナーがなかった。（文化の違い）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>国民性でプライドが高いから、英語を受け入れない、または英語がわからない人が多かった。買い物するときに言葉を調べて購入するか決めていたからより時間がかかった。</u> ・<u>ベビーシッターのアルバイトをしたが子ども（聾）との接し方が日本と違ったため、フランスのやり方に慣れるまでが大変だった。</u> <p>子どもとは手話でのコミュニケーション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>滞在許可書もらうまで時間がかかり大変だった。フランスには通訳者が300人しかいない。市役所での通訳を必要とするが、通訳者がなかなかつかまらない。まず、通訳者の予約をすることが大変。</u> <p>入国審査はデフとえば、すぐ終わる。（米国と同じ）</p> <p>B さん：</p> <p>回答なし</p>

	<p>Cさん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>ホームシックにかかった。日本での暮らしが恋しくなった。ご飯が合わなかった</u>のでレトルトをよく食べていた。現地では、がつついて食べることはなかったので、体重の大きな変動はなかったが、帰国後にむしろ太った。 ・<u>交通機関が便利じゃない</u>。バスや長距離列車を使ってじゃないと遊びに行けなかった。だから、あまり行きたいと思わなかった。 ・ホームステイ生活：イギリス人の家族と暮らした。英語発音がカナダ人とはちょっと違った。夏休みの研修時に他国から学生が沢山来て、その時だけはルームメイトの学生人数が増えた。それ以外は自分だけが留学生だった。 ・<u>大変だったことは、日本での生活以上に補聴器が必要だったこと</u>。例：お風呂入ってる時に誰かがノックしていないか気になったり、髪の毛が濡れていて嫌だったけど、<u>補聴器をつけなくては</u>いけなかったことがストレスになっていた。 <p>Dさん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>苦労したことは、生活全般において自分でやらなくては</u>いけなかったこと。<u>きこえに関する苦労体験は特</u>にない。 ・<u>アメリカ内での就職先探しは大変だった</u>。自身がアメリカ国籍ではないことからジオグラフィーの専門的職業志望は会社から断られることが多かった。理由は、特別な秘密データを扱うから。 <p>Eさん：</p> <p>住んでいた家の近くで2～3回銃トラブルが起きていた。たまたま健聴の友人がいたから危険を察知できた。<u>きこえないからいつトラブルに巻き込まれるかわからない</u>と思った。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化が自分に合わないこともある。→食事、ルームシェア、買い物や交通機関の不便 ・補聴器が生活の中で大切な人にとっては必要以上に装用しなくてはいけないことからストレスになる。 ・きこえないことで事件に巻き込まれる可能性→治安問題の確認は大事。

表 14-9 分析ワークシート⑨

概念名	聴覚障害者理解
定義	日本との相違
ヴァリエーション	<p>A さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>ろう者としてのアイデンティティが強い</u>。そのため、音声使用、口話を使わなくなる。指文字は使わない。手話だけでのやり取り。固有名詞も全て手話表現が決まっている。 ・ <u>ろう者に対して理解ある健聴者は身ぶり表現をしてくれる。人によってまちまち</u>。 ・ (軽度) 難聴者であつてもろうと言う。聴覚障害者同士のろう者観の違い(ろう者同士の区別)、差は日本と同様。 <p>B さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>日本と比べて、筆談をお願いしてもしてくれない時があつた。進んでいる部分と遅れている部分の差が激しいと感じた</u>。大学やろうコミュニティは進んでいるが、駅は本当に遅れていると思つた。都会の駅には手話通訳者もいたが、田舎の駅はほとんどがアフリカンアメリカンで筆談に応じてくれなかつた。 ・ レストランやスーパーは日本と同じで指さしをして通じたから、特に問題はなかつた。 ・ <u>日本人と比べて、ろう者はフレンドリーで仲間意識が強かつた</u>。アメリカ人は障害の有無関係なく、交流していた。(それぞれが) <u>自分の持つスキルでコミュニケーションを取つていた</u>。 <p>C さん：</p> <p>特になし。自分の学校はろうに対しての理解があると思つたけど、<u>実際国としてはどうかはわからない</u>。学校の先生は、<u>身内にろう者がいることから、きこえないことに対する配慮や理解もあつたと思ふ</u>。</p> <p>D さん：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>アメリカの健聴者は、きこえないと分かつては筆談とジェスチャーで積極的にコミュニケーションを取つてくれたことから、健聴者でも関わりたいと思つてくれる人がいることを知つた</u>。

	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中でろう者の存在が認知されている時は必ず通訳がついていた。 ・<u>ロサンゼルスはデフコミュニティが大きいから、ろう者にとっては生活しやすい。</u> <p>E さん：</p> <p>例：コーヒーチェーン店。<u>きこえないことを言うと、日本の場合は大きな声で話されたりするけど、アメリカは「デフ」と言うと、すぐにペンと紙を出してくれる</u>（DC はろうが多いからかもしれないけれど。）健聴者でも簡単な挨拶の手話は知っているようで、飲み物を受け取るときに「thank you」と ASL で声をかけてくれる。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本よりもろう者のアイデンティティが強い。 ・アメリカ人は、障害の有無関係なく接してくれる人が多い。きこえないことがわかるとジェスチャーや筆談をしてくれる健聴者が多い。 ・デフコミュニティが根付いている都市は生活しやすい。

表 14-10 分析ワークシート⑩

概念名	補聴器装用
定義	補聴器の重要度
ヴァリエーション	<p>A さん： 音は感知するが音声認識はできなかったので、<u>必要ない</u>と思い小学校6年生の時に外した。</p> <p>B さん： 日本での生活とあまり変わらないけど、<u>英語は筆談で行っていたから補聴器を外すことが多かった</u>。<u>補聴器の重要性はそこまで感じなかった</u>。</p> <p>C さん： 大変だったことは、<u>日本での生活以上に補聴器が必要だったこと</u>。 例：お風呂入ってる時に誰かがノックしていないか気になったり、髪の毛が濡れていて嫌だったけど、補聴器をつけなくてはいけなかったことがストレスになっていた。</p> <p>D さん： <u>日本での生活時につけるのが癖だから、アメリカに行っても当たり前のようにつけていた</u>。それでも、補聴器の電池切れやつけ忘れもあった。車の運転時はつけていた。補聴器は、音の認識のために使っている。自身にとって、補聴器は生活の一部。NCOD の隣にろう児のためのスピーチセラピストがあり、そこに補聴器や人工内耳の専門家が在駐していた。補聴器の調整・修理をしてくれる。または、日本に一時帰国した際に調整していた。</p> <p>E さん： 補聴器は<u>みんなろうだから、自分も使っていなかった</u>。その後の引っ越しで紛失した。</p>
倫理的メモ	日常生活の中で補聴器（人工内耳）を装用してる人にとっては、補聴器の重要性は高い。

表 14-11 分析ワークシート⑩

概念名	留学希望者へのアドバイス
定義	経験と自信の関連性
ヴァリエーション	<p>A さん： <u>自分に自信を持って、また自分を見失わないように！</u></p> <p>B さん： <u>なんとかなると思うし、危ないことも挑戦していくこと！！</u></p> <p>C さん： ASL での留学は聴力が重い軽いにかかわらず誰でも楽しめる留学になると思うが、<u>ASL だけでは口話で英語を話している人とはまた違った内容になってしまい、本当の英語というものがすべて身につけられないこともあるかもしれない。</u> 聴力が軽い人ならば口話での留学は大変ながらもなんとかやっていけると思うが、聴力が重い人にとっては口話での留学はかなり厳しいものとなると思う。 そのあたりも考慮して<u>どういった形で留学するのか考えてみて欲しい。</u></p> <p>D さん： <u>行って損はないと思う。自身にとっても全ての経験がプラスになっていると思う。自分一人の環境であったとしても損はない。本人にどれほどの覚悟があるか。聞こえないことに対しても、身内のいない時にでも自力で立ち直れるか、時には覚悟も必要である。こういうときのためにも現地の友達をつくること。なにかあったときに助けてくれるし、仲間意識が高まり、絆が作れる。ここから、言語や文化を学ぶきっかけにもなる。これらを乗り越えたときに、自分の今まで見えなかったことや知らなかったことがわかるようになる。</u> <u>それが成長のプラスになる。</u></p>

	<p>Eさん：</p> <p>安易な考えで留学して、精神面・体力面でぼろぼろになった人も見てきた。アメリカは危険な場所もあるから、トラブルに巻き込まれることもある。でも、<u>留学は良い経験である</u>。社会人になって人生経験を積み重ねてからいくことも良い方法。でも若いうちに行けたからできたこともある。どちらがいいとは言えない。まずは、<u>自分の目的を明確にしてから留学して、現地で周りに流されず、自分をしっかりと持って学んでほしい</u>。</p>
倫理的メモ	<ul style="list-style-type: none">・海外留学で経験したことが自分にとって強みになっている。・海外留学目的を明確にすることで自分を見失わない。

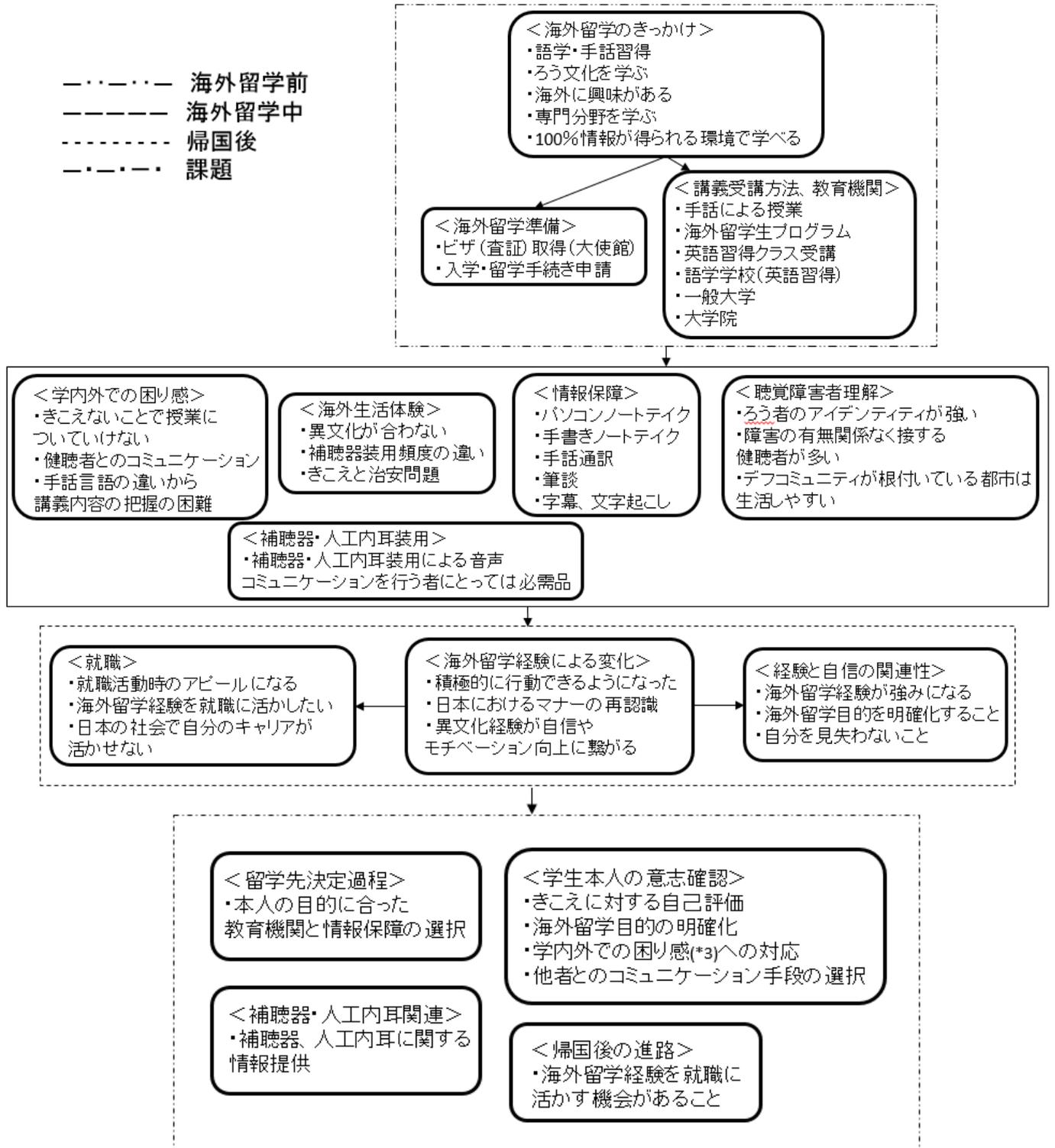


図3 カテゴリー別 面接調査結果から見た聴覚障害者の海外留学の現状

(※1)修正ストラウス・グレイザー版 GTA (M-GTA) : 個々の研究が取り上げた問い (何を明らかにしようとしたのか) とそれに対する結果 (何が分かったのか) を評価を含めて総合的に判断すべきものである。(木下康仁, 2014)

(※2)分析ワークシート: 概念名、定義、ヴァリエーション、倫理的メモに関する説明は、SLAA 研究会 (2013)を引用。

(※3)学内での困り感: 聴覚障害が故に抱える諸問題を指す。例として、学内外での学修環境 (例: きこえないことから情報の獲得が困難等)、生活環境 (例: 健聴者とのコミュニケーション等) が挙げられる。

第5章 総合的考察

本章は、第4章の聴覚障害学生と聴覚障害者への各調査の結果及び考察に対して、これらを総合的に考察するものである。本章は2節からなり、まず第1節において大学に在籍する聴覚障害学生への質問紙調査より、聴覚障害学生の海外留学に対する意識において留学に対して行きたいと思う要因及び留学に対して不安の要因、さらに先行研究（池田（2014）、岩城ら（2010））に見られる健聴学生との比較から聴覚障害学生の海外留学に対する意識に見られる特徴を検討していく。さらには海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査より海外留学の目的から帰国後までの経験に関して得た回答及び分析結果との関連についても考察する。第2節においては、本研究で得られた結果に基づいて、聴覚障害学生への海外留学支援の構築を大学等の高等教育機関における障害学生支援担当職員に提案していく。

第1節 大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学に対する意識

本研究は大きく2つの調査の結果によって、大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学の支援の在り方を検討するものとなっている。

本研究では、まず大学に在籍する聴覚障害学生への海外留学に対する質問紙による意識調査を行い、ここでは、①海外留学に対する意識調査として、聴覚障害学生が海外留学を希望する際にどのようなことで海外留学をしたいのかを把握するため、「今、是非留学したい」という質問項目に対して相関を見せた質問項目が47問中いくつあり、またその項目が何であったか、さらになぜその項目に相関が見られたのかについて考察を行った。さらに、因子分析を行い、海外留学を決める要因となるものは何かを明らかにした。次に、②海外留学に対して不安に思う項目は何かについて考察した。最後に、③語学学習経験や国際交流経験の有無を調査した結果をまとめた。

まず、①については、相関係数と因子分析の結果より、聴覚障害学生は半年以上の海外留学を希望し、主に海外でしか経験できない生活体験、異文化体験をしてみたいという聴覚障害学生の強い意志が「意欲・期間」因子より見られた。また、留学先で学ぶ手話や言

語、専門的な学問を修学し、それらの経験を踏まえたことを自分自身の自信に繋げたいことが明らかになった。留学先の教育機関での授業受講については、情報保障の提供があることが海外留学決定の大きな要因としてあり、留学内容や留学期間も重視されていることが「情報保障」因子から明らかとなった。

一方、聴覚障害学生が海外留学に対して不安に思う要因については、少数ながら海外留学費用と留学先の教育機関の授業についていけるかが不安の要因要素として明らかになったものの、健聴大学生と比較すると不安要素はあまり高くなかった。また、「大学からの支援」因子、「語学力」因子、「留学生活に対する不安のなさ」因子からも海外留学先での不安があまりないことが明らかとなった。

池田（2011）や杉野ら（2014）より、健聴大学生は、語学能力の向上を目的とした海外留学を希望する傾向が強く、海外留学は将来の就職などの人生を見据えた計画の一部にあることが考えられる。しかし、聴覚障害学生の場合は、まず海外留学の経験を実現させ、現地で何を得的のか、それから次にどう次の自分のキャリアに活かすのか段階を踏みながら長期計画的に行動する傾向があることが明らかとなった。

②については、聴覚障害学生が海外留学に対して不安に思う要因を探求した。あまり相関は見られなかったが、少数ながらも海外留学費用と留学先の語学学校／専門学校／大学生活において、授業についていけるかに対しての不安要素のあることが見られた。

岩城・野水（2010）が調査した健聴大学生の留学志向を見ると、健聴大学生は金銭面の問題を海外留学に対して不安に思う理由とし、この結果は留学を躊躇する理由と留学に行きたくない理由の上位5位内に入っていた。

しかし、聴覚障害学生は在籍する大学を休学しなくてはいけない現状がある中でも、助成金や奨学金を得て海外留学できることを理解し、また身近にその経験を有する聴覚障害者（例：大学の先輩、友人等）がいることから、海外留学に対して敷居が高いとあまり感じていないと筆者は考える。このことから、聴覚障害学生が海外留学に対して不安に感じる要因は少なからずあるとしても健聴大学生ほど不安に感じていないことが見てとれた。

③については、海外留学を意識した年齢については、高校生時と大学2年次と人生の分岐点で視野に入れることも明らかになった。上記2つの時期は、進路について模索すると思われる時期にあるため、その時期に海外留学を意識する傾向があるということは、グローバル人材育成への可能性も十分に備わっていると考えることができる。

本節の最後に、本研究の質問紙調査と面接調査との関連において4項目の考察を行った。各項目については以下の通りである。

①海外留学形態と期間

海外留学決定時に、日本の大学に在籍していた聴覚障害学生の場合、休学をして半年～1年間の海外留学をしていた。一方、海外留学を3年以上していた聴覚障害者の場合、日本の大学を卒業した後、または社会人になってから海外留学をしていた。この中には、学士や修士を取得した者と語学学習を目的とした者がいた。

質問紙調査の結果より、「半年～1年以上の留学がしたい」と回答した聴覚障害学生が多く見られたこと、さらに「海外留学をしてみたいと考えた時期」に高校生の時と大学2年生の時という回答が見られたことから、現在大学に在籍する聴覚障害学生が海外留学を行う場合、休学をすることがやむを得ない状況となることが推察できる。

②語学学習の形態

質問紙調査の結果からは、「現地の手話、言語を学んでみたい」が海外留学をしたいに対して相関が見られた。一方、面接調査の結果からは、語学学習については一般大学の海外留学生対象のプログラムの一環として語学学習をした聴覚障害者と語学学校で学習した聴覚障害者、留学先のろう学校で学習した聴覚障害者がいたことが明らかとなった。一般大学とろう学校での語学学習者は情報保障支援を受けながら学ぶ形態と留学先の手話から学ぶ形態で学習していた。しかし、語学学校で学習した聴覚障害者の場合は補聴器装用による聴覚活用での語学学習を目的としていたため、情報保障支援は受けていなかった。これらのことから、聴覚障害学生がどのような目的を持って語学学習を行うかによって、学習形態も異なることが明らかになり、海外留学プログラムの増築と情報保障支援の環境整備が課題として挙げられると考えられた。

③情報保障と聴覚障害理解

海外留学先の国の中でも聴覚障害者理解の有無は様々である。面接調査の結果より、聴覚障害学生受け入れ体制が整っている大学においては、情報保障支援の種類が充実していて、聴覚障害学生のニーズに合った支援が提供されていることが明らかとなった。さらに、デフコミュニティが根付いている地域や聴覚障害者が多く見られる大学や地域におい

では、健聴者であっても多少手話ができたり、障害の有無に関係なくコミュニケーションが取れたりと生活しやすい環境であることが明らかとなった。

しかし、本調査では面接調査対象者のほとんどが聴覚障害において理解のある環境で生活していたことから、聴覚障害理解があまり見られない国や地域での実態については把握することができなかった。

④聴覚障害学生の成長における海外留学の効果

質問紙調査より、「海外留学のキャリアを持つことによって自分自身に自信をつけた」に相関が見られた。また、面接調査からは、「自分の意見がはっきり言えるようになった」「イベントやボランティアに積極的に参加した」「いろいろな人と話をする事でモチベーションが高まった」等、海外留学をしたことが自信に繋がっていることが明らかとなった。このことから、海外留学中の成功体験、失敗体験が聴覚障害学生自身の成長に結びつくと考えられた。

第2節 聴覚障害学生への海外留学支援構築についての提案

本調査の結果に基づいて、聴覚障害学生への海外留学支援構築に向けた提案を①海外留学前、②海外留学中、③帰国後として提示していく。さらに、聴覚障害学生への海外留学構築に関与すると思われる大学内組織（例：留学支援センター、障害学生支援室、教務課等）に予想される業務内容と聴覚障害学生自身が海外留学を効果的にさせるための作業内容についての提案も行う。

① 海外留学前

海外留学前は、主に大学内の組織形態、海外留学先の教育機関（例：交換留学協定校）の見直し及び再構築が必要であると考え。交換留学プログラムを通して、海外留学を行う学生は、規定の語学力や海外生活の適正能力を有していることが条件にあり、多数希望者の中から数名しか選考されないことが現状である。また、一般大学における交換留学の場合、聴覚障害学生が派遣された事例が見られていないことから、交換留学プログラムの案内に派遣先の大学及び教育機関での情報保障支援や障害学生支援センターの有無に関する詳細を明記し、聴覚障害学生に交換留学制度を活用した海外留学の選択肢の提供を行うことを提案する。一方、私費留学で海外留学を行う聴覚障害学生に対しては、休学中の学費支払い額の再制定を行い、経済面の負担を軽減し海外留学をしやすくする。近年、一般大学では単位の互換制度は広まりつつあるが、現在大学を休学して海外留学をしている聴覚障害学生は公益財団と法人団体の事業による海外留学派遣プログラムで海外留学をしていることから単位互換が認められず、4年間の卒業は不可能な状況である。大学復学時に更に学費納付が必須となるため、経済的に負担がかかるので、海外留学を目的とした大学の休学者への対応における改善が必要である。

次に、聴覚障害学生は手話を含む語学学習への意欲が強いことから、大学の交換留学プログラムの中に語学留学プログラムを設置することを提案する。海外留学先の大学及び教育機関には語学学習を目的としたプログラムを設置し、海外留学先での学習の可能領域を広げる。これより、聴覚障害学生の海外留学の目的をより明確化させることが可能になることが考えられる。現在、聴覚障害学生が語学留学、またはそれに類似したプログラムで海外留学を行う場合は、私費留学か基金制度利用（例：公益財団法人ダスキン愛の輪基金）による方法になる。

海外留学期間については、面接調査対象者4名から「留学期間と語学力の伸びには関係があると思う」にYesの回答を得ていることと質問紙調査結果の「半年～1年以上の留学がしたい」「3年以上の留学がしたい」に相関が見られたことから、留学期間に関連した情報提供及び相談等の支援も必要であることが考えられる。上記の語学学習（手話を含む）と関連付けて考察すると、期間と語学学習が「今、是非留学したい」との相関が見られることもあり、今日の聴覚障害学生が求めている海外留学形態のニーズとして挙げられる。

さらに大学内で聴覚障害学生支援に該当する各部署が連携を図ることで、聴覚障害学生の海外留学における大学の支援体制に関する事例収集をすることができ、対応マニュアルの作成が可能となる。

②海外留学中

海外留学中は、主に海外留学先での講義受講時に聴覚障害学生がどのような情報保障支援を受けているか、きこえに関することで生活面において困り感を感じていないか等、留学先にいる聴覚障害学生との振り返りの機会を設けながら、情報収集を行うことが必要であると考えられる。まず、講義受講時において、聴覚障害学生は日本の大学で受けてきた情報保障を念頭に置きながら、自分のニーズに合った情報保障を選択すると推測した。このことから、海外留学先の大学及び教育機関の中に聴覚障害学生が講義受講に関する相談が可能な障害学生支援センターが設置されているかを主に把握していく必要がある。ここでも、日本の大学の留学支援センター及び障害学生支援室と海外留学先の教育機関の障害学生支援センター又は海外留学生支援センターの連携が重要であり、聴覚障害学生が安心して海外留学並びに講義受講可能になるという結果が質問紙調査と面接調査からも考察できた。また、聴覚障害学生が実際に講義を受講した上で、自分にとってどのようなニーズが適合するののかを知る機会を得ることで自身の障害認識やエンパワメントにも繋がる効果があると考えられる。

さらに、生活面においては、海外留学先の地域によって聴覚障害者に対する理解の有無やデフコミュニティの勢力など様々な環境に遭遇し、国に対する異文化体験やろう文化に対する異文化体験をする機会があることが期待できる。ここで、聴覚障害者としての自己の確立や健聴者との交流から自身のきこえに対する気づき等を得る可能性があるとして十分に考えられる。聴覚障害学生が自分にできること、できないことを理解し、特にできないことに対してどのように対処していくかについても期待したい。そして、その問題に対して

どのようにして解決したか、成功体験と失敗体験が得られるような海外留学生活を送ることを期待する。上記のような聴覚障害学生の成長過程を把握するために大学からは、聴覚障害学生に定期的に留学日誌を課題とすることで、聴覚障害学生と海外留学に関する事例収集と聴覚障害学生の安否確認をすることが可能になると考える。

補聴器・人工内耳、その他補聴援助機器（例：デジタルワイヤレス補聴システム）を活用して海外留学を希望する聴覚障害学生には、補聴援助機器に関する情報提供を行うことを提案する。聴覚障害学生の海外留学先での補聴援助機器の利用環境（例：機器の利用周波数帯）、補聴器や人工内耳の修理、点検等に対応可能な施設等をあらかじめ確認しておくことで、補聴援助機器を活用する聴覚障害学生が安心して海外生活を送れると推察する。

③帰国後

帰国後は、聴覚障害学生の成長を振り返る好機であることから、大学関係者（教職員、学生）を参加対象にした海外留学報告会の実施、海外留学報告書の作成、学内新聞・学内広報・ホームページ等の掲載等を行い、聴覚障害学生の活躍を社会に広げる機会を目的とした環境構築を行う。このように公表することにより、聴覚障害学生の社会に対する自信に繋がる効果が期待でき、さらには、大学は新しい取り組みとして社会に周知することができ、相互利益を生むことができると推察する。

また、聴覚障害学生が海外留学によって得た経験、修学内容を就職に結びつけるために、大学内にある就職相談窓口やキャリア教育センター等が聴覚障害者雇用に関する情報収集を行い、聴覚障害学生への対応を改善させる必要があると考える。

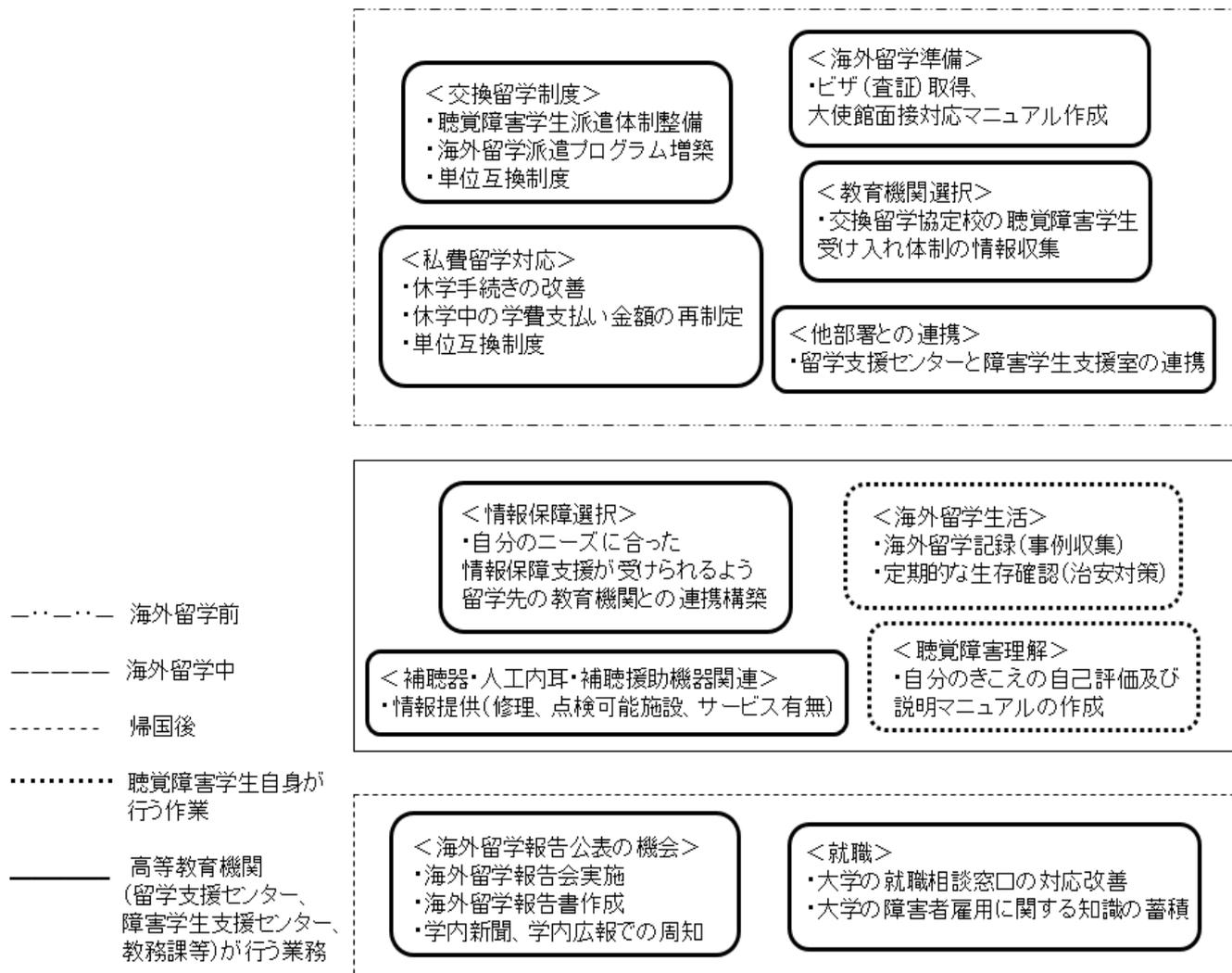


図 4 聴覚障害学生への海外留学支援構築の提案

第 3 部 結論

第6章 総括と結論

第1節 総括と結論

1.問題の所在

高等教育機関の中でも特に大学で、海外留学を積極的に推進し、大学生のグローバル人材の育成が見られている。ここ数年で海外留学をする日本人大学生も増加しているが、海外留学形態は様々で大学の協定校間の交換留学制度の他に、休学をして私費留学を行う傾向が見受けられている。また、海外留学をするにあたり課題も見られているが、これらは健聴大学生についての研究で明らかにされてきた。しかしながら、聴覚障害学生の海外留学とその支援に関する先行研究が見られないことから、本研究では、聴覚障害学生が海外留学に対してどのような意識を持っているのか等について質問紙調査を行った。さらに、海外留学経験を有する聴覚障害者に対し、留学時にどのような経験をし、何を学んだのか等について面接調査を行った。これらの調査から、大学に在籍する聴覚障害学生への海外留学支援において、どのような体制を構築するかを検討し、大学等の高等教育機関における障害学生支援担当職員に対する提案を行った。

第1章では、日本のグローバル化及び日本人の海外留学の現状、海外留学の効果と問題点、そして日本人の海外留学を促進するための課題について先行研究（河合（2009）,黒田（2010）,経済産業省（2010）,文部科学省（2009,2011）,池田（2011）,杉野ら（2014）,法務省（2016）,独立行政法人日本学生支援機構（2016））より課題を明らかにし、文献的に考察をした。しかし、先行研究は全て日本人学生という大きな枠組みで述べられていることから、本研究の対象者である聴覚障害学生の現状把握においては極めて困難であった。

第2章では、聴覚障害学生の海外留学の現状について把握した。現在、聴覚障害学生、聴覚障害者は、公益財団法人ダスキン愛の輪基金とNPO法人日本ASL協会の2ヶ所からの派遣事業を利用して海外留学を行うことが主流であることが明らかとなった。しかし、聴覚障害学生が在籍する大学の協定校への交換留学制度を通して海外留学をした聴覚障害学生の事例は見られず、また、聴覚障害学生の海外留学に対する意識についての先行研究は見られなかった。

2. 質問紙調査と面接調査による研究

本研究の目的は、聴覚障害学生が海外留学に対してどのような意識を持っているのか、留学意志はあるのか、さらに聴覚障害を有するが故の特有の問題があるのか、また、海外留学経験を有する聴覚障害者から留学時にどのような経験をし、何を学んだのか、困難に感じた場面はどのような時だったのかについて質問紙調査並びに面接調査を行い、これらの調査から、大学に在籍する聴覚障害学生への海外留学支援において、どのような体制を構築するかを検討し、大学等の高等教育機関における障害学生支援担当職員に提案することである。

聴覚障害学生への海外留学に対する意識調査では、ピアソンの相関係数と主因子法による因子分析を用いて、聴覚障害学生が海外留学を考える際に「今、是非留学したい」に相関を示す要因（質問項目）が何かと聴覚障害学生が海外留学を決定する要因が何かを明らかにした。また、海外留学に対して不安に思う要因が何かを把握した。

聴覚障害学生が海外留学を意識し、海外留学の決め手の要因となっていることは、情報保障であった。このことは、因子分析結果より明らかとなり、留学先の教育機関における情報保障の提供並びに聴覚障害に対する理解が重要視されていることが言える。また、留学先の教育機関における障害に関する支援コーディネーターの存在は、海外留学に対する意識並びに決定要因に大きく影響していることも明らかとなった。さらに、海外留学への意欲や留学期間についても決定要因として関与していて、日本では経験できないことへの興味を強く持っていることが把握できた。なお、大学からの支援、語学力への不安、留学生活に対する不安要因は少なかったが、留学費用に対する不安はやや高いことが明らかとなった。

海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査では、海外留学時の経験から学んだことや得たこと、困難に感じたことについて調査した。この調査からは、面接対象者の回答内容に沿って質問を行う半構造化面接法の手法で進行した。回答結果から、カテゴリー、概念名、定義をそれぞれ生成し、最終的に海外留学前、海外留学中、帰国後、課題と4つの枠組みを作成することができ、聴覚障害学生の海外留学の現状を把握した。

第5章では、これらの調査を総合的に考察し、以下のことを結論とした。

聴覚障害学生への海外留学に対する意識調査では、半年以上の海外留学を希望し、主に海外でしか経験できない生活体験、異文化体験をしてみたいという聴覚障害学生の強い意

志が見られた。また、留学先で学ぶ手話や言語、専門的な学問を修学し、それらの経験を踏まえたことを自分自身の自信に繋げたいことが明らかになった。さらに、留学先の教育機関での授業受講については、情報保障の提供があることが海外留学決定の大きな要因としてあり、留学内容や留学期間も重視されていることが明らかとなった。海外留学を就職に活かしたい意志も見られたが、海外留学経験を自信に繋げる気持ちの方が強く見られた。

海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査では、面接対象者の回答より、各々海外留学を意識した経緯や海外留学の決断に至る背景が様々であったが、共通して見られたことは自身が海外で何を学びたいかが明確にされていたことであった。聴覚障害学生が海外留学の意志決定を強めるためには、自分の目的に合った留学先、教育機関の選択が可能であることが第一に重要であると考えた。

さらに、聴覚障害学生への海外留学支援体制の在り方については、海外留学前は主に大学内の組織形態、海外留学先の教育機関（例：交換留学協定校）の見直し及び再構築が必要であると考えられる。さらに、海外留学中については、主に海外留学先での講義受講時に聴覚障害学生がきちんと情報保障を受けられているか、きこえに関することで生活面において困り感を感じていないか等、留学先にいる聴覚障害学生と振り返りの機会を設けながら、情報収集を行うことが必要である。そして、帰国後は、聴覚障害学生の成長を振り返る好機であることから、聴覚障害学生の活躍を社会に広げる機会を目的とした環境整備が必要である。

第2節 今後の課題

本研究を進めることによって、大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学に対する意識の中で、海外留学をしたいと思う要因と海外留学に対して不安に思う要因が何かについて明らかにし、海外留学経験を有する聴覚障害者への面接調査によって、海外留学支援制度構築において提案を行った。しかしながら、大学に在籍する聴覚障害学生の海外留学に対する意識調査に関しては、残された課題も多く、今後さらに検討していく必要がある。特に、聴覚障害学生への意識調査では、質問項目に対して回答者である聴覚障害学生が簡単に答えられるように短文での質問を行った。また、選択回答に対して深く掘り下げた質問項目は作成しなかった。このことから、聴覚障害学生の海外留学を意識する背景まで探求することができなかった。今後、本研究をさらに突き詰めていくにあたり、今回提示した質問項目を聴覚障害学生が選択した背景を探求するための質問項目作成をすることを課題として挙げる。また、大学が海外留学後の聴覚障害学生に対して、就職支援の情報提供を行う際に、聴覚障害学生のより明確なキャリア推進に繋げることを確実にするために、海外留学を経た後の自分自身の将来へのビジョンをどのように思い描いているかについても再度探求する必要があることが考えられる。

本研究は大学に在籍する聴覚障害学生を対象にした研究を行ったが、聴覚障害学生の属性による比較検証は行わなかった。今後は、より多く大学の聴覚障害学生を対象とし、大学の種別、聴力レベル別、性別、年齢別等で比較研究を行うことも検討していきたい。さらに、海外留学を行うにあたり、聴覚障害学生が補聴器・人工内耳によるコミュニケーション活用をしていくのか等、きこえに関する情報収集を行い、聴覚障害特有の問題の有無について細密に探求する必要があると考えたため、このことも課題とする。

また、大学の聴覚障害学生支援構築においては、本研究で示した提案を実現化するために大学組織形態と協定校との交換留学制度の現状を調査する必要がある。

引用・参考文献

- ・池田庸子（2011）「海外留学の意義とメリットを考えるー海外留学によって何が得られるかー」, 『留学交流』, 2011年7月号 Vol.4, 独立行政法人日本学生支援機構
- ・岩城奈巳・野水勉（2010）「名古屋大学生と海外留学-全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの-」, 『名古屋大学留学生センター紀要』8: pp.17-22
- ・河合淳子（2009）「海外留学の動機と制度的制約 - 日本人学生対象アンケート・インタビューの考察」, 京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第3回アンケート・インタビュー調査報告書』, 京都大学国際交流センター pp.105-120
- ・河合淳子（2011）「大学における学部学生の留学促進」, 『留学交流』, 2011年5月号 Vol.2, 独立行政法人日本学生支援機構
- ・木下康仁著(2014)「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」, 弘文堂
- ・黒田一雄(2015)「高等教育グローバル化の理想的展望 - 国際社会への貢献を目指して - Conceptual Exploration of Globalizing Higher Education: Prospecting Contributions to the Global Society」 『留学交流』2015年5月号 Vol.50 pp.2 - 4, 独立行政法人日本学生支援機構
- ・村瀬嘉代子（1999）「聴覚障害者の心理臨床」, 日本評論社
- ・中島武史（2015）「リスニング特別措置の現状についての一考察」, 『ろう教育科学ー 聴覚障害児教育とその関連領域ー』, 57（1）, pp.11-28, ろう教育科学会
- ・杉野竜美・武寛子・正楽藍（2014）「大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方ー日本の四年制大学におけるインタビュー調査よりー」, 国際協力論集 21（2・3）
- ・聴力障害者情報文化センター（2005）「聴覚障害者の精神保健サポートハンドブック」, 社会福祉法人聴力障害者情報文化センター

・上原景子・秋山奈巳・金澤貴之・中野聡子・ローリー＝ラドキー・大島康平・小林量・萩原翔平・奥泉志帆（2013）「聴覚障害学生のための英語学習促進－音声認識字幕を用いた教養英語における実践例を通して－」，群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編,62, pp.53－67

インターネットによる引用・参考文献

- ・法務省（2016）「平成27年末現在における在留外国人数について（確定値）」，
<http://www.moj.go.jp/content/001178165.pdf> ，
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html 2016年6月6日アクセス
- ・公益財団法人ダスキン愛の輪基金， <https://www.ainowa.jp/jigyou/haken/index.html>
2016年12月27日アクセス
- ・文部科学省(2009)「3. 留学生にとって魅力ある社会 - 日本の社会のグローバル化 - 」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249707.htm
2016年12月29日アクセス
- ・文部科学省（2009）「5. 日本人の海外留学」，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm
2016年5月31日アクセス
- ・文部科学省（2011）「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」，
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf
- ・文部科学省(2014)「今後の英語教育の改善充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
2016年12月29日 アクセス
- ・文部科学省(2016)『「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」等について 1. 日本人の海外留学者数』，
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryuugaku/1345878.htm 2016年5月31日アクセス

・ NPO 法人 ASL 協会, <http://www.npojass.org/nf/ryugaku> 2016 年 12 月 27 日アクセス

・ 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 (2010) 「報告書～産学官でグローバル人材の育成を～」,

http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf

2016 年 6 月 6 日アクセス

・ 総務省統計局 (2016) 「人口推計」, <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201605.pdf>

2016 年 6 月 7 日アクセス

・ SLAA 研究会(2013)「質的研究手法－5 つの研究手法 (Creswell,2003)－」,

<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~hirai.akiyo.ft/meeting13.files/SLAA2013912.pdf> , 2016

年 12 月 20 日アクセス

付録

表 12-1 フェイスシート

A さん	回答内容
留学先（国名）	フランス
教育機関名	国立パリろう学校
留学期間	4年
問 1	No
問 2	Yes
問 3	No
問 4	No
問 5	Yes
問 6	Yes
問 7	Yes
問 8	Yes
問 9	Yes
問 10	No
問 11	Yes

表 12-2 フェイスシート

B さん	回答内容
留学先（国名）	アメリカ合衆国
教育機関名	マサチューセッツ州立大学
留学期間	5 ヶ月
問 1	No
問 2	Yes
問 3	No
問 4	No
問 5	Yes
問 6	No
問 7	Yes
問 8	Yes
問 9	Yes
問 10	No
問 11	Yes

表 12-3 フェイスシート

Cさん	回答内容
留学先（国名）	カナダ
教育機関名	Greater Toronto Language School
留学期間	11ヶ月
問 1	No
問 2	No
問 3	Yes
問 4	Yes
問 5	Yes
問 6	Yes
問 7	Yes
問 8	Neither
問 9	Neither
問 10	Yes
問 11	Neither

表 12-4 フェイスシート

D さん	回答内容
留学先（国名）	アメリカ合衆国
教育機関名	カリフォルニア州立大学ノースリッジ校（CSUN）
留学期間	4 年（滞在期間：約 6～7 年）
問 1	Yes
問 2	Yes
問 3	Yes
問 4	No
問 5	Yes
問 6	Yes
問 7	Yes
問 8	Yes
問 9	Yes
問 10	Neither
問 11	Yes

表 12-5 フェイスシート

E さん	回答内容
留学先（国名）	アメリカ合衆国
教育機関名	ギャローデット大学
留学期間	3年
問 1	No
問 2	Yes
問 3	Yes
問 4	Yes
問 5	No
問 6	No
問 7	Neither
問 8	Yes
問 9	Yes
問 10	No
問 11	Yes

謝辞

筆者が聴覚障害の分野に興味を持ち、聴覚障害分野の最高峰である筑波技術大学での修学に至った動機は、日本大学法学部在籍時の一人の聴覚障害学生との出会いでした。その学生からの「自分が学んだ外国語を活かして海外に行ってみたい」という想い、そして筆者自身もアメリカ留学を2度経験していることから、聴覚障害学生と海外を結び合わせた支援が何かできないかと模索したことが本研究の出発地でした。

本研究を進めるにあたり、指導教員の筑波技術大学佐藤正幸教授には、入学前より聴覚障害に関するご指導、本研究におけるご指導、ご支援と多岐に渡りお世話を頂きました。さらに、副指導教員の筑波技術大学須藤正彦教授には、本研究について多くのご助言を賜りました。なお、本研究のみならず実習や就職活動等においてもいつも応援して下さったお二人に厚くお礼を申し上げます。

また、本研究の質問紙調査、面接調査にご協力して頂いた皆様には本当に感謝申し上げます。回答して頂いた内容から多くの結果が得られ、充実した考察を行うことができ、聴覚障害学生への海外留学支援体制の在り方について課題を明らかにすることができました。しかしながら、大学に在籍する聴覚障害学生への海外留学支援が実現化するためには、大学組織についての調査等のさらなる研究が今後必要であると考えています。

筑波技術大学修士課程の2年間は、私の人生の分岐点でもあり、多くの方々からご指導を頂きました。思うままにやっごらんと背中を押して応援して下さった筑波技術大学石原保志研究科長、障害学生支援コーディネーターとして障害学生支援に携わりたいという目標に向けて学びの機会を多く与えて下さり、ご指導、ご支援、ご助言をして頂いた筑波技術大学白澤麻弓准教授、障害者高等教育研究支援センターの皆様、障害学生支援の世界に導いて下さった明治学院大学学生サポートセンター岡田孝和氏、自己を見つめ直す機会を作ってく下さり、障害学生支援について多岐に渡るご指導をして下さった宮城教育大学関係者の皆様並びに松崎丈准教授、早稲田大学障がい学生支援室関係者の皆様並びに志磨村早紀氏には、この場をお借りして深く感謝し、お礼を申し上げます。

そして、2年間共に学び、充実した時間を過ごすことができた第2期生の仲間である宮町悦信氏と繁益陽介氏に出会えたことは筆者にとってかけがえのない宝物です。ありがとうございました。

最後に、障害学生支援という分野で本研究が行えたこと、それと同時に松原夢伽の人間としての成長に繋がる学びができたことを本当に嬉しく思います。本当にありがとうございました。

平成29年1月

松原夢伽